



Sun SPARC™ Enterprise T2000 サーバ インストールレーションガイド

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 820-1331-10
2007 年 4 月, Revision A

コメントの送付: <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

Copyright 2007 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

富士通株式会社は、本製品の一部に対して技術提供および調査を行いました。

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) および富士通株式会社は、それぞれ本書に記述されている製品および技術に関する知的所有権を所有または管理しています。これらの製品、技術、および本書は、著作権法、特許権などの知的所有権に関する法律および国際条約により保護されています。これらの製品、技術、および本書に対して米国 Sun Microsystems 社および富士通株式会社がある知的所有権には、<http://www.sun.com/patents> に掲載されているひとつまたは複数の米国特許、および米国ならびにその他の国におけるひとつまたは複数の特許または出願中の特許が含まれています。

本書およびそれに付随する製品および技術は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。富士通株式会社およびサン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、このような製品または技術および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。本書の提供は、明示的であるか黙示的であるかを問わず、本製品またはそれに付随する技術に関するいかなる権利またはライセンスを付与するものではありません。本書は、富士通株式会社または米国 Sun Microsystems 社の一部、あるいはそのいずれかの関連会社のいかなる種類の義務を含むものでも示すものでもありません。

本書および本書に記述されている製品および技術には、ソフトウェアおよびフォント技術を含む第三者の知的財産が含まれている場合があります。これらの知的財産は、著作権法により保護されているか、または提供者から富士通株式会社および/または米国 Sun Microsystems 社へライセンスが付与されているか、あるいはその両方です。

GPL または LGPL が適用されたソースコードの複製は、GPL または LGPL の規約に従い、該当する場合に、一般ユーザーからのお申し込みに応じて入手可能です。富士通株式会社または米国 Sun Microsystems 社にお問い合わせください。

この配布には、第三者が開発した構成要素が含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリュウミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人 日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、Java、Netra、Sun StorEdge、docs.sun.com、OpenBoot、SunVTS、Sun Fire、SunSolve、CoolThreads、J2EE は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標もしくは登録商標です。サンロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

富士通および富士通のロゴマークは、富士通株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

SPARC64 は、Fujitsu Microelectronics, Inc. 社および富士通株式会社が米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の商標です。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun™ Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザー・インタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

United States Government Rights - Commercial use. U.S. Government users are subject to the standard government user license agreements of Sun Microsystems, Inc. and Fujitsu Limited and the applicable provisions of the FAR and its supplements.

免責条項: 本書または本書に記述されている製品や技術に関して富士通株式会社、米国 Sun Microsystems 社、またはそのいずれかの関連会社が行う保証は、製品または技術の提供に適用されるライセンス契約で明示的に規定されている保証に限り、このような契約で明示的に規定された保証を除き、富士通株式会社、米国 Sun Microsystems 社、およびそのいずれかの関連会社は、製品、技術、または本書に関して、明示、黙示を問わず、いかなる種類の保証も行いません。これらの製品、技術、または本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。このような契約で明示的に規定されていないかぎり、富士通株式会社、米国 Sun Microsystems 社、またはそのいずれかの関連会社は、いかなる法理論のもとに第三者に対しても、その収益の損失、有用性またはデータに関する損失、あるいは業務の中断について、あるいは間接的損害、特別損害、付随的損害、または結果的損害について、そのような損害の可能性が示唆されていた場合であっても、適用される法律が許容する範囲内で、いかなる責任も負いません。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植のある可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典:	<i>Sun SPARC Enterprise T2000 Server Installation Guide</i> Part No: 819-7988-10 Revision A
------------	---



Adobe PostScript

目次

はじめに xiii

1. 設置の準備 1

必要な工具および機器 2

オプションのコンポーネントの取り付け 2

ESD に関する注意事項 2

設置の概要 3

データポートおよびケーブル配線の注意 5

 ポートの場所 5

 ケーブル配線の注意 6

スライドレール構成部品の注意事項 8

安全のための注意事項 10

2. サーバの取り付け 11

サーバのラックへの取り付け 11

 ▼ スライドレール構成部品を取り付ける 12

 ▼ ケーブル管理キットを取り付ける 19

 ▼ スライドレールおよび CMA の動作を確認する 22

サーバの取り外し 24

サーバへのケーブルの接続 25

- コネクタの場所 25
 - ▼ Ethernet ネットワークケーブルに接続する 26
 - ▼ SC シリアル管理ポートに接続する 27
 - ▼ SC ネットワーク管理ポートに接続する 28
- AC 電源ケーブル 29
- TTYA シリアルポート 29
- USB ポート 30
- CMA を使用したケーブルの管理 30
 - ▼ ケーブルクリップの開閉を行う 30
 - ▼ ケーブルクリップを移動する 31
- 3. システムの電源投入 33
 - はじめてのシステムの電源投入 33
 - 電源投入の概要 33
 - システムコンソール 33
 - ALOM CMT システムコントローラ 34
 - パスワード 34
 - ▼ はじめてシステムの電源を入れる 35
 - システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする方法 37
 - システムコントローラへのログイン 38
 - ▼ シリアル管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする 38
 - ▼ システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する 39
 - ▼ システムコントローラをリセットする 42
 - ▼ ネットワーク管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする 44
 - 一般的な処理でのシステムコントローラの使用 44
 - ▼ システムの電源を入れる 44
 - ▼ システムコンソールに接続する 45
 - ▼ システムの正常な初期化を実行する 45

Solaris オペレーティングシステムの起動 47

- ▼ Solaris オペレーティングシステムを起動する 47
- ▼ システムをリセットする 49
- ▼ システムの電源を再投入する 49

システムの機能の確認 50

A. ファームウェアの更新 51

ファームウェアの更新 51

- ▼ ファームウェアを更新する 51

B. 起動デバイスの選択 55

- ▼ 起動デバイスを選択する 55

索引 57

目次

図 1-1	SPARC Enterprise T2000 サーバ	1
図 1-2	背面パネルの機能	5
図 1-3	フロントパネルの USB ポート	6
図 1-4	スライドレール構成部品のセクション	8
図 1-5	スライドレール構成部品のロックの位置	9
図 2-1	スライドレール構成部品のロックの解除	12
図 2-2	固定部品のリリースボタンの位置	13
図 2-3	スライドレールの中央セクションのロックの解除	14
図 2-4	固定部品のシャーシへの取り付け	15
図 2-5	スライドレールの取り付け	16
図 2-6	スライドレールの間隔ツールを使用したスライドレール間の間隔の調整	17
図 2-7	スライドレールへのシャーシの取り付け	18
図 2-8	左のスライドレールの背面側への CMA レール拡張部品の挿入	19
図 2-9	内部 CMA コネクタの取り付け	20
図 2-10	外部 CMA コネクタの取り付け	21
図 2-11	スライドレールの左側の取り付け	22
図 2-12	スライドレール構成部品のロックの解除	23
図 2-13	スライドレールのリリースボタン	24
図 2-14	背面パネルの機能	26
図 2-15	フロントパネルの USB ポート	26

図 2-16	Ethernet ネットワーク接続	27
図 2-17	システムコントローラのシリアル接続	27
図 2-18	システムコントローラのネットワーク接続	28
図 2-19	シリアルポート	29
図 2-20	ケーブルクリップを開く	31
図 2-21	ケーブルクリップの取り外し	32
図 2-22	ケーブルクリップの取り付けまたは移動	32
図 3-1	背面パネルの電源コネクタ	36

表目次

表 1-1	Ethernet 接続の転送速度	7
表 3-1	デバイス、OpenBoot パス名、および場所の割り当て	46

はじめに

『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ インストールガイド』では、SPARC™ Enterprise T2000 サーバの設置に役立つ手順、基本的な情報、および参考資料について説明します。

このマニュアルの設置に関する手順は、システム管理者が Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) を使用した経験があることを前提としています。

注 – ハードドライブ以外のすべての内部コンポーネントの取り付けは、認定された保守技術者のみが行なってください。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次の章で構成されています。

第 1 章では、サーバの設置の概要について説明します。

第 2 章では、サーバのラックへの取り付け手順について説明します。

第 3 章では、サーバの構成と電源投入、および追加ソフトウェアのインストールについて説明します。

付録 A では、システムコントローラファームウェアおよびサーバファームウェアの更新手順について説明します。

付録 B では、起動デバイスの選択手順について説明します。

出荷キットの内容一覧

サーバの標準コンポーネントは出荷時に取り付けられています。ただし、PCI カードやモニターなどのオプションを注文した場合、これらは個別に出荷されます。

注 – 出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要求してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

- サーバの部品がすべて届いていることを確認します。
 - SPARC Enterprise T2000 サーバ
 - スライドレール構成部品
 - 各種の装置ラックに適合した、さまざまなサイズの取り付けねじおよびナットのパッケージ
 - 6つのケーブルクリップが事前に取り付けられているケーブル管理部品
 - ケーブル管理部品のメーカーの手順書
 - サーバと一緒に注文したすべてのオプションのコンポーネント

UNIX コマンド

このマニュアルには、システムの停止、システムの起動、およびデバイスの構成などに使用する基本的な UNIX コマンドと操作手順に関する説明は含まれていない可能性があります。これらについては、以下を参照してください。

- 使用しているシステムに付属のソフトウェアマニュアル
- 下記にある Solaris™ オペレーティングシステムのマニュアル
<http://docs.sun.com>

シェルプロンプトについて

シェル	プロンプト
UNIX の C シェル	<code>machine_name%</code>
UNIX の Bourne シェルと Korn シェル	<code>\$</code>
スーパーユーザー (シェルの種類を問わない)	<code>#</code>

書体と記号について

書体または記号*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例。	<code>.login</code> ファイルを編集します。 <code>ls -a</code> を実行します。 <code>% You have mail.</code>
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して表します。	<code>% su</code> Password:
<i>AaBbCc123</i>	コマンド行の可変部分。実際の名前や値と置き換えてください。	<code>rm filename</code> と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『Solaris ユーザーマニュアル』
「 」	参照する章、節、または、強調する語を示します。	第 6 章「データの管理」を参照。 この操作ができるのは「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	<code>% grep `^#define` \</code> <code>XV_VERSION_STRING'</code>

* 使用しているブラウザにより、これらの設定と異なって表示される場合があります。

関連マニュアル

オンラインのマニュアルは、次の URL で参照できます。

<http://www.sun.com/documentation>

タイトル	説明	Part No.
『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ 設置計画マニュアル』	サーバのサイト計画情報	820-1321
『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ プロダクトノート』	サーバに関する最新情報。このマニュアルの最新版は、 http://www.sun.com/documentation から入手できます	820-1312
『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ アドミニストレーションガイド』	サーバに固有の管理タスクを実行する方法	820-1340
『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ サービススマニュアル』	診断を実行してサーバの障害追跡を行う方法、およびサーバの部品を取り外して交換する方法	820-1334
『Advanced Lights Out Manager (ALOM) CMT ガイド』	サーバで Sun Advanced Lights Out Manager (ALOM CMT) ソフトウェアを使用する方法	(バージョンごとに異なる)
『Sun SPARC Enterprise T2000 Server Safety and Compliance Guide』	このサーバに固有の安全性および適合性に関する情報の提供	819-7993

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	URL
マニュアル	http://jp.sun.com/documentation/
サポート	http://jp.sun.com/support/
トレーニング	http://jp.sun.com/training/

Sun 以外の Web サイト

このマニュアルで紹介する Sun 以外の Web サイトが使用可能かどうかについては、Sun は責任を負いません。このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、広告、製品、またはその他の資料についても、Sun は保証しておらず、法的責任を負いません。また、このようなサイトやリソース上、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、商品、サービスの使用や、それらへの依存に関連して発生した実際の損害や損失、またはその申し立てについても、Sun は一切の責任を負いません。

コメントをお寄せください

マニュアルの品質改善のため、お客様からのご意見およびご要望をお待ちしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルと Part No. を記載してください。

『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ インストールガイド』、Part No. 820-1331-10

第1章

設置の準備

この章では、第2章で説明するサーバの設置手順に関する基本的な情報について説明します。

この章は、次のセクションで構成されています。

- 2 ページの「必要な工具および機器」
- 2 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」
- 2 ページの「ESD に関する注意事項」
- 3 ページの「設置の概要」
- 5 ページの「データポートおよびケーブル配線の注意」
- 8 ページの「スライドレール構成部品の注意事項」
- 10 ページの「安全のための注意事項」

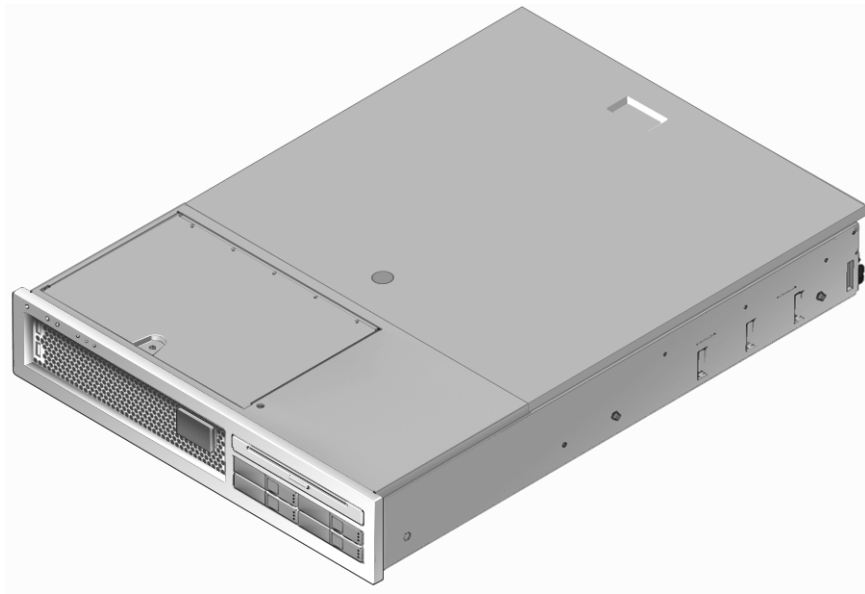


図 1-1 SPARC Enterprise T2000 サーバ

必要な工具および機器

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよびアースストラップ

さらに、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスを用意する必要があります。

- ASCII 端末
- Sun のワークステーション
- 端末サーバ
- 端末サーバに接続されたパッチパネル

オプションのコンポーネントの取り付け

サーバの標準コンポーネントは出荷時に取り付けられています。ただし、増設メモリーや PCI カードなどのオプションを注文した場合、これらは個別に出荷されます。可能な場合は、サーバをラックに取り付ける前に、これらのコンポーネントを取り付けてください。

出荷時に取り付けられていないオプションを注文した場合、取り付け手順については『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ サービスマニュアル』を参照してください。

注 – オプションのコンポーネントのリストは、予告なしに更新される可能性があります。サーバでサポートされているコンポーネントの最新のリストについては、[Web サイト](#)を参照してください。

ESD に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバの設置または保守を行う場合は、アースされた静電気防止用リストストラップ、フットストラップ、または同等の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防いでください。



注意 – 電子コンポーネントが静電気によって損傷すると、システムが永続的に使用できなくなるか、Sun の保守技術者による修復が必要になる可能性があります。電子コンポーネントを静電気による損傷から保護するには、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面にコンポーネントを置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

設置の概要

この設置マニュアルでは、次の順序で実行される手順について説明します。

1. 使用するサーバと一緒に出荷されるコンポーネントがすべて届いていることを確認します。詳細は、xiv ページの「出荷キットの内容一覧」を参照してください。
2. 使用しているシステムの設定情報を収集します。次のパラメータなどの詳細情報については、システム管理者に確認してください。
 - ネットマスク
 - システムコントローラの IP アドレス
 - ゲートウェイの IP アドレス
3. システムと同梱されているオプションの Sun™ のコンポーネントを取り付けます。増設メモリーなど、その他のオプションのコンポーネントを購入した場合は、サーバをラックに取り付ける前にこれらのコンポーネントを取り付けてください。詳細は、2 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」を参照してください。
4. ラックまたはキャビネットにサーバを取り付けます。詳細は、11 ページの「サーバのラックへの取り付け」を参照してください。

注 – このマニュアルでは、**ラック**という用語はオープンラックまたはクローズキャビネットのいずれかを意味します。

5. サーバをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続して、システムメッセージを表示します。詳細は、33 ページの「はじめてのシステムの電源投入」を参照してください。



参考 – 電源ケーブルを接続する前に、シリアル端末または端末エミュレータを接続するようにしてください。システムに AC 電源が接続されるとすぐに、システムコントローラの電源が入り、診断が実行されます。診断テストで問題が発見されると、シリアル端末に出力されます。詳細は、『Advanced Lights Out Management (ALOM) CMT ガイド』を参照してください。

6. データケーブルをサーバに接続しますが、AC 電源ケーブルはまだ接続しないでください。詳細は、25 ページの「サーバへのケーブルの接続」を参照してください。
7. AC 電源ケーブルをサーバに接続し、エラーメッセージが表示されるかどうかを確認します。詳細は、33 ページの「はじめてのシステムの電源投入」を参照してください。



注意 – サーバおよび関連機器が適切にアースされていないと、感電する可能性があります。

注 – システムコントローラ (SC) は、3.3 V のスタンバイ電圧で動作します。システムに AC 電源が接続されるとすぐに、システムコントローラの電源が入り、診断が実行され、ALOM CMT ファームウェアが初期化されます。

8. システムコントローラの起動後に、シリアル管理ポートを介して ALOM CMT コマンド行インタフェースにアクセスします。詳細は、38 ページの「シリアル管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。
9. SC ネットワークアドレスを構成します。詳細は、39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」を参照してください。

注 – SC シリアル管理ポートを介してシステムコントローラのネットワーク設定を構成するまで、SC ネットワーク管理ポートは動作しません。

10. システムコントローラをリセットして、新しい構成を有効にします。詳細は、42 ページの「システムコントローラをリセットする」を参照してください。
11. ALOM CMT ソフトウェアを使用してキーボードからサーバの電源を入れます。詳細は、44 ページの「システムの電源を入れる」を参照してください。
12. Solaris™ OS を設定します。詳細は、47 ページの「Solaris オペレーティングシステムの起動」を参照してください。

Solaris OS は、サーバにプリインストールされています。電源を入れると、自動的に Solaris OS の設定手順に進みます。

13. サーバに必要なパッチ (1 つまたは複数) をインストールします。

必要なパッチのリストについては、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ プロダクトノート』を参照してください。

14. Solaris メディアキットから追加ソフトウェアを読み込みます (任意)。

Solaris メディアキット (別売) には、サーバの操作、設定、および管理に役立つソフトウェアが収録された CD が複数含まれています。収録されているすべてのソフトウェアのリストおよびインストール手順の詳細は、メディアキットに付属のマニュアルを参照してください。

データポートおよびケーブル配線の注意

ポートの場所

サーバのポートの場所については、図 1-2 および図 1-3 を参照してください。

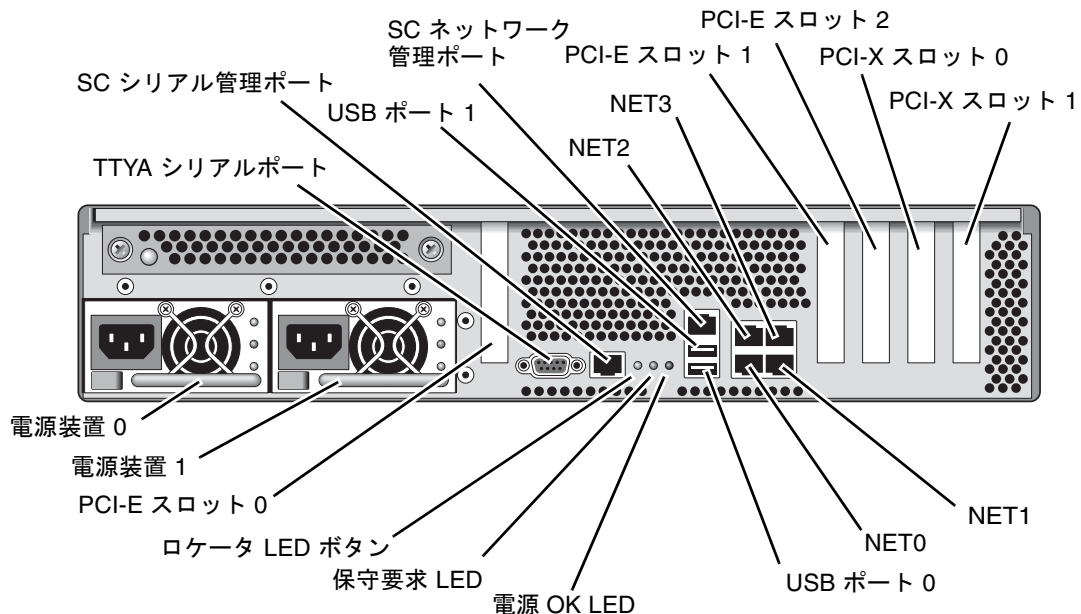


図 1-2 背面パネルの機能

USB ポート 2 および 3 はフロントパネルにあります (図 1-3)。

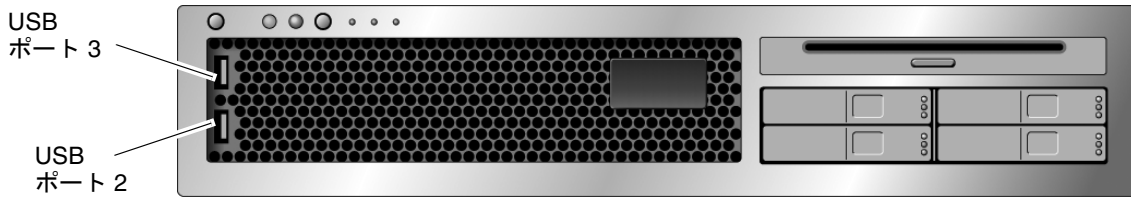


図 1-3 フロントパネルの USB ポート

ケーブル配線の注意

- サーバの最小ケーブル接続:
 - 1 つ以上のシステムボード上の Ethernet ネットワーク接続 (NET ポート)
 - システムコントローラのシリアル管理ポート (SER MGT ポート)
 - システムコントローラのネットワーク管理ポート (NET MGT ポート)
 - 2 台のシステム電源装置の電源ケーブル
- システムコントローラ (SC) 管理ポート: ALOM CMT システムコントローラで使用する SC 管理ポートは 2 つあります。
 - SC シリアル管理ポート (ラベル SER MGT) では RJ-45 ケーブルを使用します。このポートは常に使用可能です。このポートは、ALOM CMT システムコントローラへのデフォルトの接続です。
 - SC ネットワーク管理ポート (ラベル NET MGT) は、ALOM CMT システムコントローラへのオプションの接続です。SC シリアル管理ポートを介してシステムコントローラのネットワーク設定を構成するまで、このポートは使用できません。詳細は、37 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする方法」を参照してください。SC ネットワーク管理ポートでは、10/100 BASE-T 接続用に RJ-45 ケーブルを使用します。このポートでは、ギガビットネットワークへの接続はサポートされていません。
 - 詳細は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ 製品概要』を参照してください。

- **Ethernet ポート**には、NET0、NET1、NET2、および NET3 のラベルが付いています。Ethernet インタフェースは、10 Mbps、100 Mbps、および 1000 Mbps で動作します。Ethernet ポートの転送速度を表 1-1 に示します。

表 1-1 Ethernet 接続の転送速度

接続タイプ	IEEE 用語	転送速度
Ethernet	10BASE-T	10 Mbps
Fast Ethernet	100BASE-TX	100 Mbps
ギガビット Ethernet	1000BASE-T	1000 Mbps

- **TTYA シリアルポート**: シリアルデバイス用のヌルモデムケーブルが付いた DB-9 コネクタを使用します。このポートは、Solaris OS および OpenBoot メッセージでは ttya と表示されます。このポートは、SC シリアル管理ポートには接続されません。
- **USB ポート**: USB ポートでは、ホットプラグがサポートされています。システムの動作中に、システムの運用に影響を与えることなく、USB ケーブルや周辺装置を接続したり切り離したりできます。
 - OS の動作中にのみ、USB ホットプラグ処理を実行できます。システムの ok プロンプトが表示されているときやシステムの起動が完了する前は、USB ホットプラグ処理はサポートされていません。
 - 2 つの USB コントローラには、それぞれデバイスを 126 台まで接続でき、1 つのシステムにつき合計 252 台の USB デバイスを接続できます。
- **AC 電源ケーブル**: データケーブルの接続が完了し、サーバをシリアル端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) に接続するまでは、電源ケーブルを電源装置に接続しないでください。AC 電源ケーブルを電源に接続するとすぐに、サーバがスタンバイモードになり、ALOM CMT システムコントローラが初期化されます。サーバが端末、PC、またはワークステーションに接続されていないと、60 秒後にシステムメッセージが失われる場合があります。

スライドレール構成部品の注意事項

ラックマウントキットには、スライドレール構成部品が2つ含まれています。スライドレール構成部品は、ラックの右側または左側のいずれかに取り付けることができます。

各スライドレール構成部品は、3つのセクションのスライドレールおよび取り外し可能な固定部品で構成されます(図1-4)。

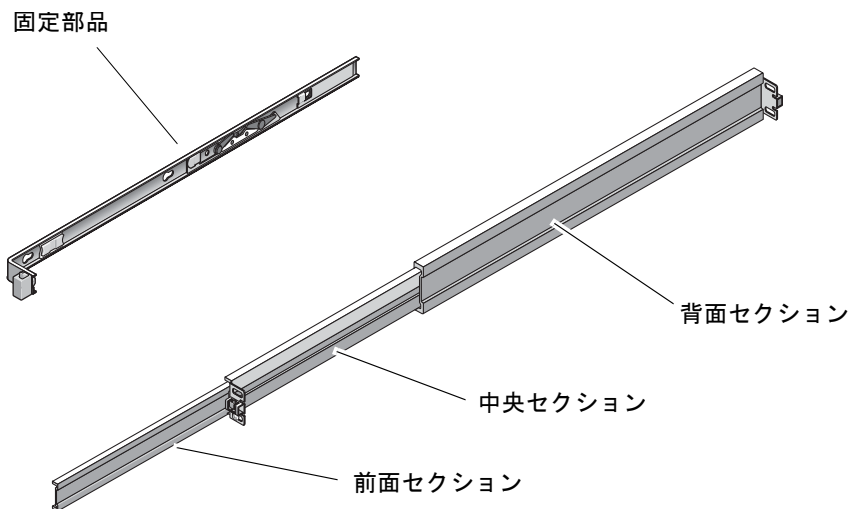


図 1-4 スライドレール構成部品のセクション

- スライドレールは前面セクション、中央セクション、および背面セクションで構成されています。中央セクションと背面セクションには取り付けねじ用の穴があり、61 cm (24 インチ) ~ 93 cm (36.5 インチ) のラックの奥行に合わせて調整されます。前面セクションを伸ばすと、サーバをラックの外に移動することができます。
- 取り外し可能な固定部品は、スライドレールから 36 cm (14 インチ) スライドさせると適切な位置でロックされます。この場所で固定部品のロックを解除すると、さらに 30 cm (12 インチ) スライドしてからスライドレールから外れます。そのあと、サーバシャーシの右側または左側に固定部品を取り付けます。
- スライドレール構成部品には、合計 5 つのロック (図 1-5) があることに注意してください。4 つのロックが固定部品にあります。1 つのロックがスライドレールの前面セクションにあります。ロックの使用については、第 2 章の取り付け手順を参照してください。

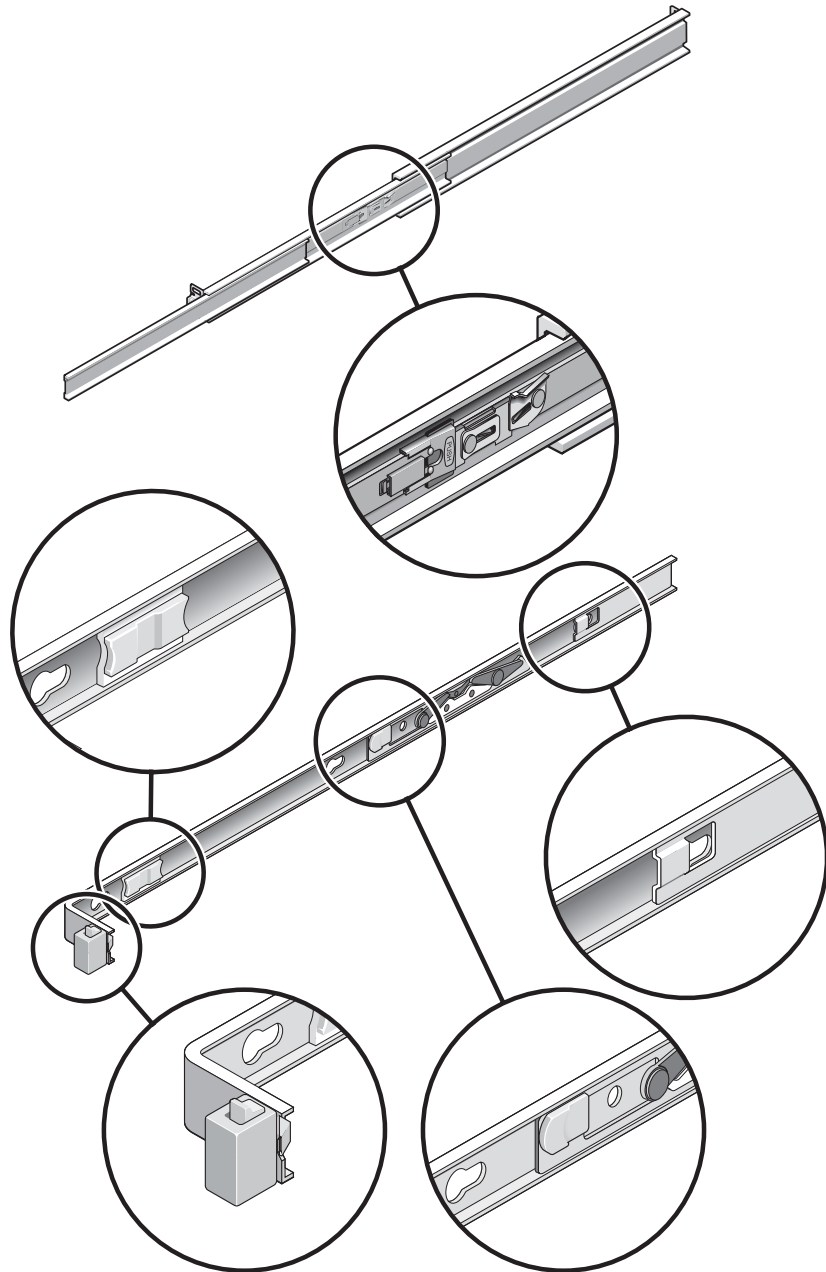


図 1-5 スライドレール構成部品のロックの位置

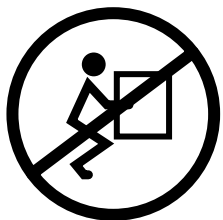
安全のための注意事項



注意 – 取り付け作業を開始する前に、装置ラックに転倒防止バーを配置してください。



注意 – サーバの重量は約 18 kg (40 ポンド) です。この章の手順に従って、システムを持ち上げてラック格納装置に取り付けるには、2 人の作業員が必要です。



注意 – 2 人で行う手順については、各手順の前後および作業中に常に意思の疎通を図り、混乱が起これないようにしてください。

第2章

サーバの取り付け

この章では、装置ラックにサーバを取り付ける手順について説明します。

注 – ラックマウントキットに説明書が付属している場合は、この章の手順ではなくラックマウントキットの説明書の手順を使用してください。サーバの取り付けを実行したあとで、第3章に進んで、はじめての電源投入を行なってください。

この章は、次のセクションで構成されています。

- 11 ページの「サーバのラックへの取り付け」
- 25 ページの「サーバへのケーブルの接続」
- 30 ページの「CMA を使用したケーブルの管理」

注 – 「左」および「右」という表現は、装置を前面または背面のいずれかから見た場合のユーザーにとっての左および右を指しています。

サーバのラックへの取り付け

注 – サーバの取り付けを開始する前に、ラックマウントキットの部品がすべてそろっていることを確認してください。詳細は、xiv ページの「出荷キットの内容一覧」を参照してください。

ラックマウントキットには、スライドレール構成部品が2つ含まれています。スライドレール構成部品は、ラックの右側または左側のいずれかに取り付けることができます。

スライドレール構成部品は、スライドレールと取り外し可能な固定部品の 2 つの部品で構成されます。スライドレールはラックポストに取り付けます。固定部品は、サーバシャーシに取り付けます。

▼ スライドレール構成部品を取り付ける

1. 両方の固定部品をそれぞれのスライドレールから完全に引き出します。
 - a. スライドレールロックの上下のロックボタンを同時に押し続けます (図 2-1)。

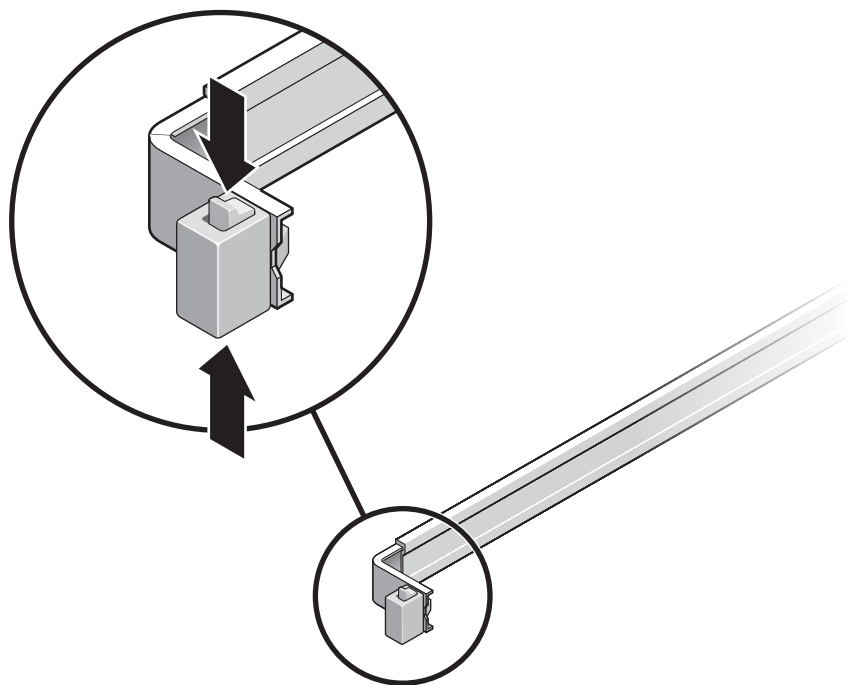


図 2-1 スライドレール構成部品のロックの解除

- b. 伸ばした位置でロックされるまで、固定部品を引き出します。
- c. 固定部品のリリースボタンを図 2-2 で示す方向にスライドさせて、固定部品をスライドレールから引き出します。

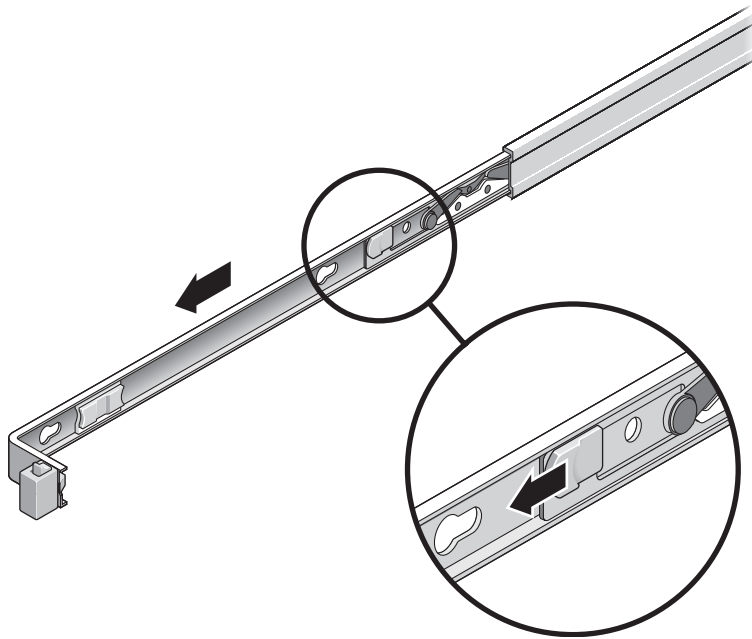


図 2-2 固定部品のリリースボタンの位置

- d. スライドレールの中央セクションにある、Push というラベルが付いた金属製のレバー (図 2-3) を押してから、中央セクションをラックに向かって押し込みます。

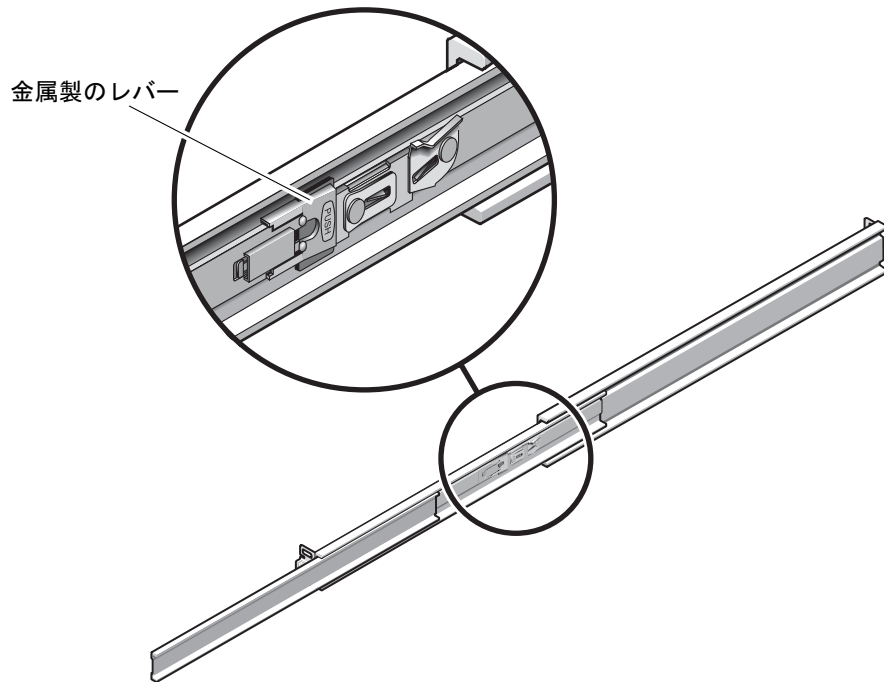


図 2-3 スライドレールの中央セクションのロックの解除

2. シャーシの右側に固定部品を取り付けます。
 - a. スライドレールロックを前面側にして、固定部品の 3 つのはめ込み用の穴とシャーシ側の 3 つの位置決め用のピンの位置を合わせて、シャーシに固定部品を配置します (図 2-4)。

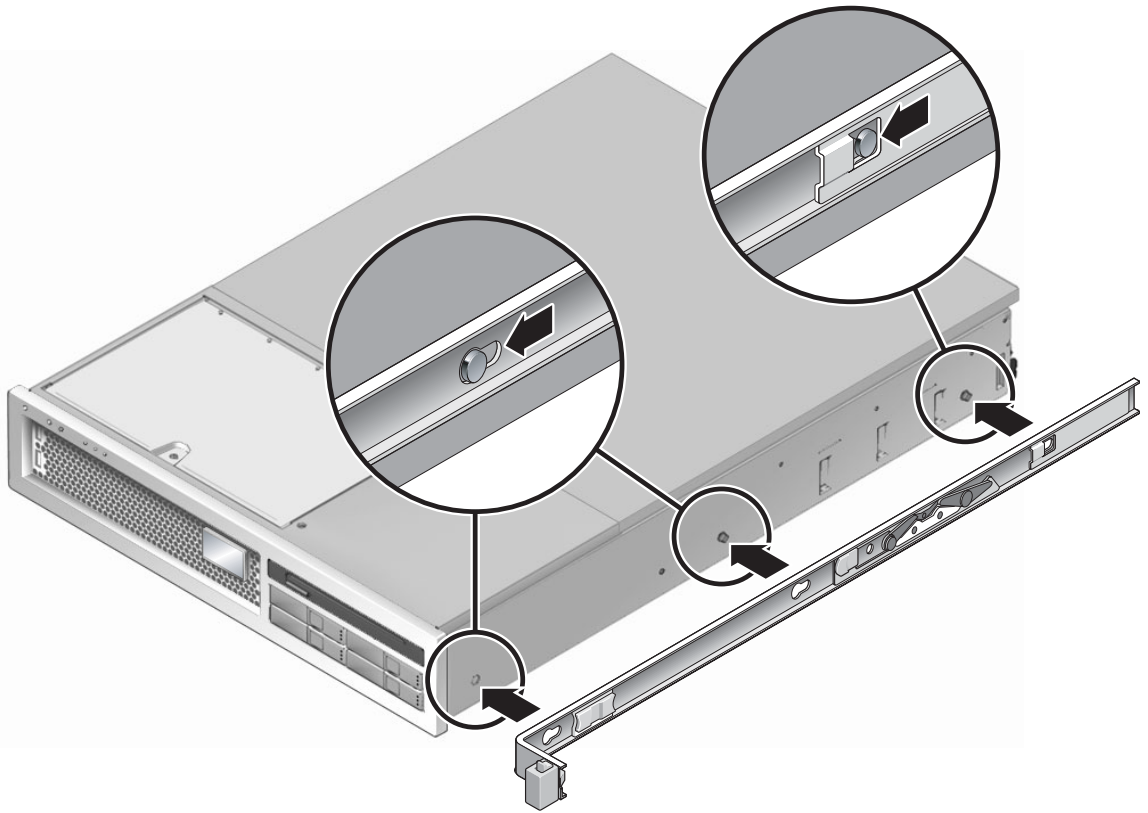


図 2-4 固定部品のシャーシへの取り付け

- b. 固定部品の 3 つのはめ込み用の穴を通して突き出た 3 つの位置決め用のピンの先端を使用して、部品がカチッと音を立ててロックされるまで、固定部品をシャーシの前面に向かって引っ張ります。
 - c. 図 2-4 の右側に示されているように、3 つの位置決め用のピンがすべてのはめ込み用の穴に固定され、背面側の位置決め用のピンが固定部品のロックにかみ合っていることを確認します。
3. シャーシの左側に 2 つめの固定部品を取り付けます。
 4. ラックポストにスライドレールを取り付けるときに使用する、ラックのねじ穴の番号を確認します。
サーバは、2 ラックユニットの高さ (2 RU) です。スライドレールは、2 RU スペースの下半分を使用します。

5. スライドレールを取り付けるために使用するねじを確認します。

使用しているラックのラックポストにねじ込み式の取り付け用ねじ穴がある場合は、ねじ山がメトリックか標準かを確認します。マウントキットに含まれているパッケージから適切なねじを選択します。

使用しているラックにねじ込み式の取り付け用ねじ穴がない場合、取り付けねじはケージナットを使用して固定されます。

6. スライドレールを前面右側のラックポストに取り付けます。

- a. 2本のねじを使用して、スライドレールの正面側を前面右側のラックポストに緩く取り付けます (図 2-5)。

注 - ねじはまだ締め付けないでください。

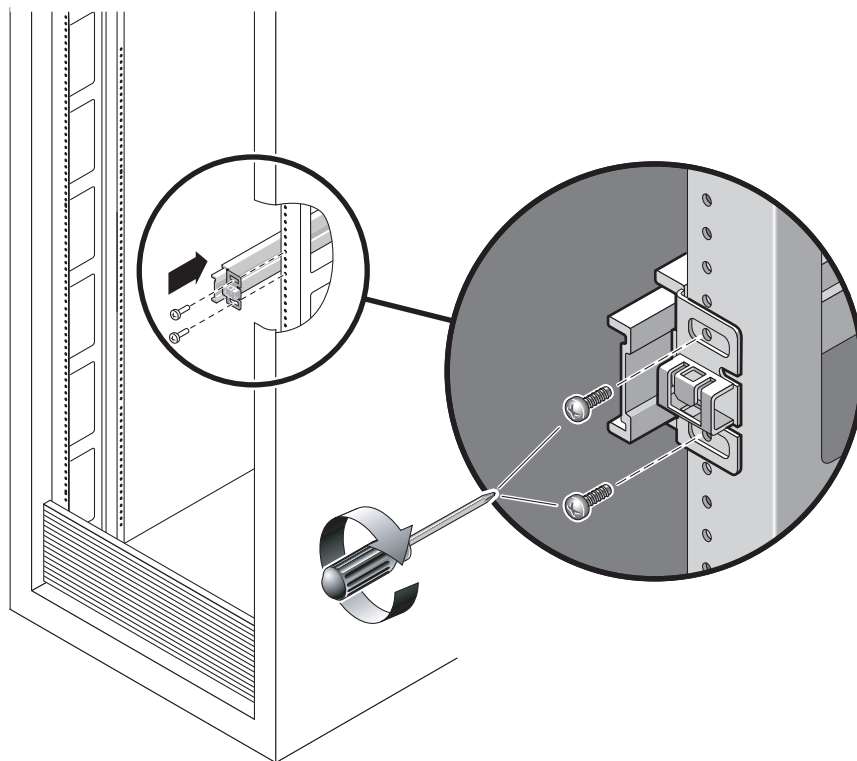


図 2-5 スライドレールの取り付け

- b. 背面側の取り付けフランジを背面のラックポストの外側に届く位置までスライドさせて、スライドレールの長さを調整します。

- c. 2本のねじを使用して、スライドレールの背面側を背面のラックポストに緩く取り付けます。
7. 同じ方法で、2本めのスライドレールを左のラックポストに取り付けます。この場合も、ねじは締め付けしないでください。
8. スライドレールの間隔ツールを使用して、スライドレール間の間隔を調整します。
 - a. ラックの前面で、左のレールの端にツールの左側を差し込みます (図 2-6)。

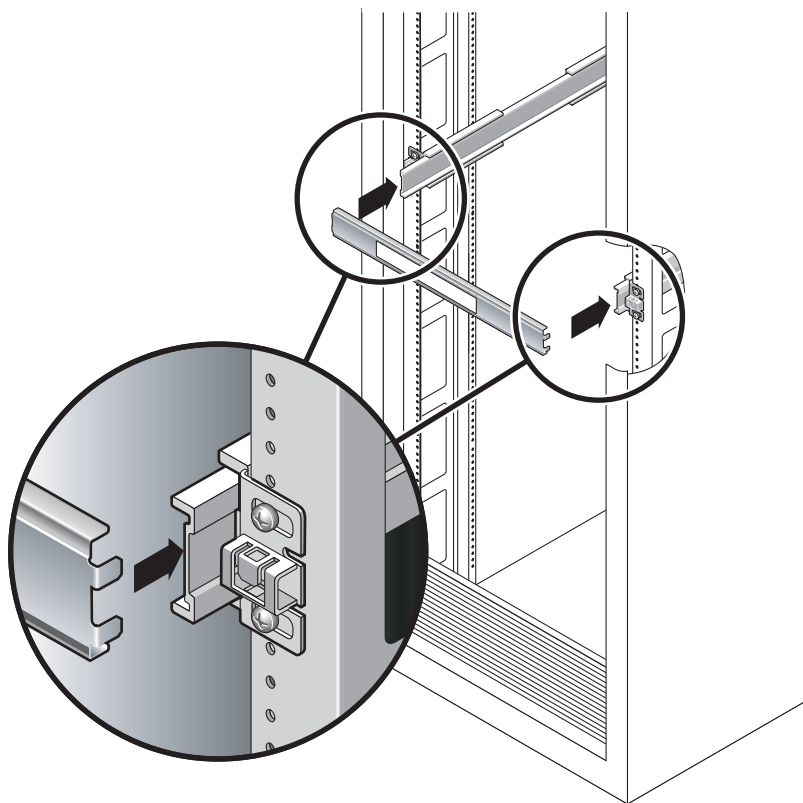


図 2-6 スライドレールの間隔ツールを使用したスライドレール間の間隔の調整

- b. 右のレールの前面側の端にツールの右側を挿入し、必要に応じてレールの端を右または左にスライドさせながら、ツールの端が両方のレールの端に入るようにします。

これで、レール間の間隔が固定部品を取り付けたサーバの幅と等しくなります。
- c. ねじを締めて、適切な位置でレールの端を固定します。
- d. ラックの背面で、レールの背面側の端に対して手順 a ~ 手順 c を繰り返します。

9. シャーシまたはラックの準備が整ったら、転倒防止バーを配置します。



注意 – 伸ばしたスライドレール上のサーバの重量によって、装置ラックが転倒する可能性があります。



注意 – サーバの重量は約 18 kg (40 ポンド) です。この章の手順に従って、システムを持ち上げてラック格納装置に取り付けるには、2 人の作業員が必要です。

10. 固定部品の端をスライドレールに挿入します (図 2-7)。

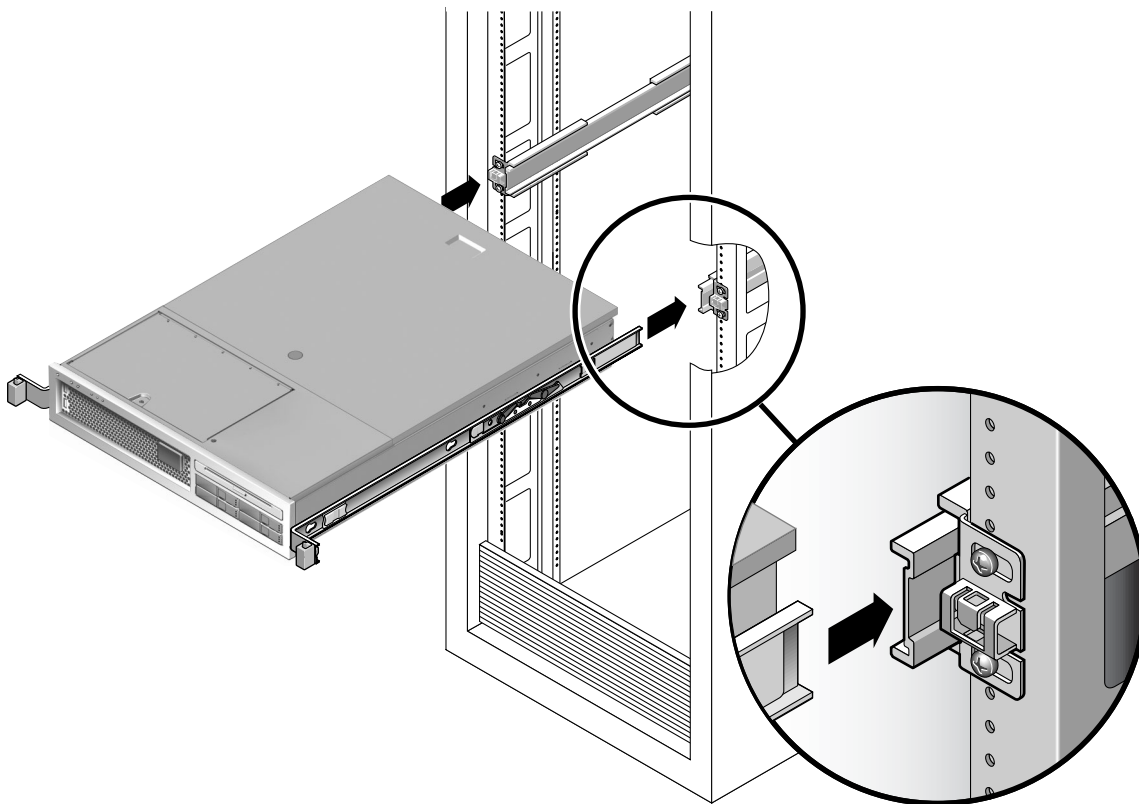


図 2-7 スライドレールへのシャーシの取り付け

11. シャーシをラックにスライドさせて入れます。



注意 – 次に進む前に、サーバがラックに安全に取り付けられ、スライドレールが固定部品にロックされていることを確認してください。

▼ ケーブル管理キットを取り付ける

ケーブル管理部品 (CMA) は、左および右のスライドレール構成部品の端に差し込みます。CMA の取り付けには、ねじは必要ありません。



注意 – この取り付け作業中は、CMA を支えておいてください。3 か所の取り付け位置のすべてで CMA が固定されるまで、この部品が重さのためにぶら下がらないようにしてください。

1. ラックの背面で、CMA レール拡張部品を左のスライドレール構成部品の端に差し込みます (図 2-8)。レール拡張部品の前面側にある爪が適切な位置でカチッという音を立てます。

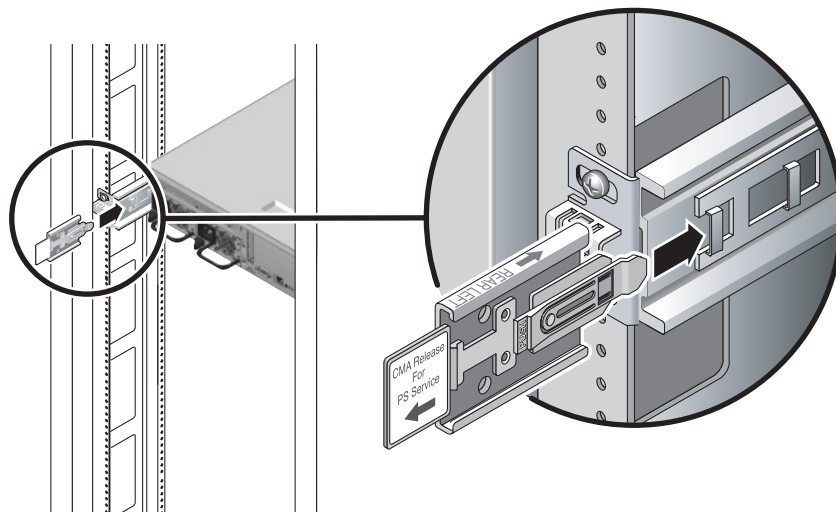


図 2-8 左のスライドレールの背面側への CMA レール拡張部品の挿入

2 つの CMA アームの右側には、ヒンジ付きの拡張部品が付いています。メーカーの手順書では、小さい方の拡張部品が CMA Connector for Inner Member と呼ばれています。この拡張部品は、右の固定部品に取り付けます。大きい方の拡張部品は CMA Connector for Outer Member と呼ばれており、右のスライドレールに取り付けます。

2. 小さい方の拡張部品を固定部品の端にあるクリップに挿入します (図 2-9)。

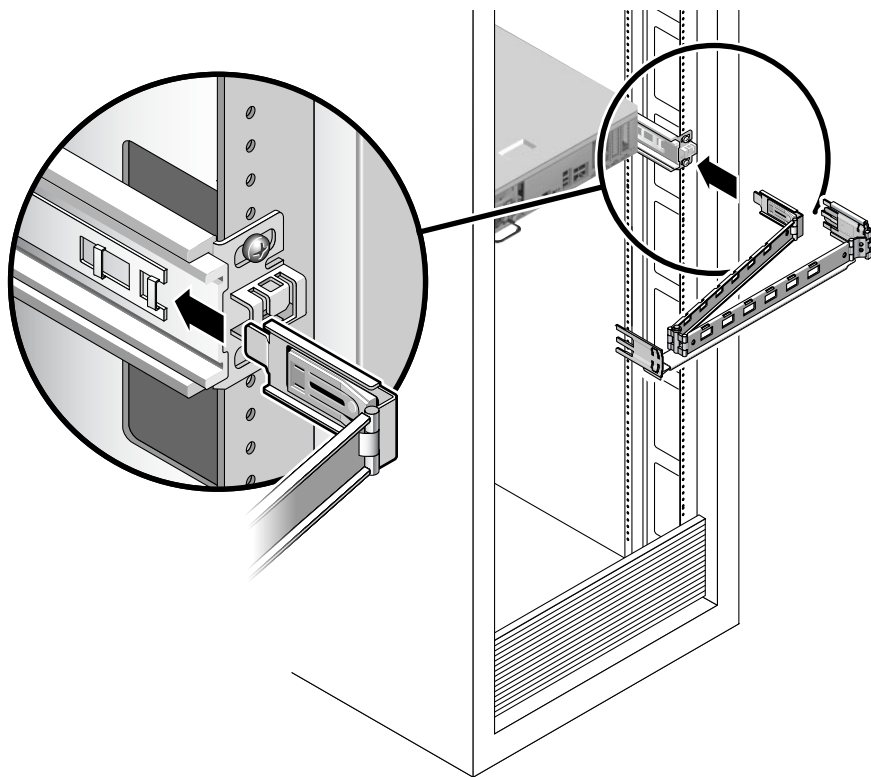


図 2-9 内部 CMA コネクタの取り付け

3. 大きい方の拡張部品を右のスライドレールの端に挿入します (図 2-10)。

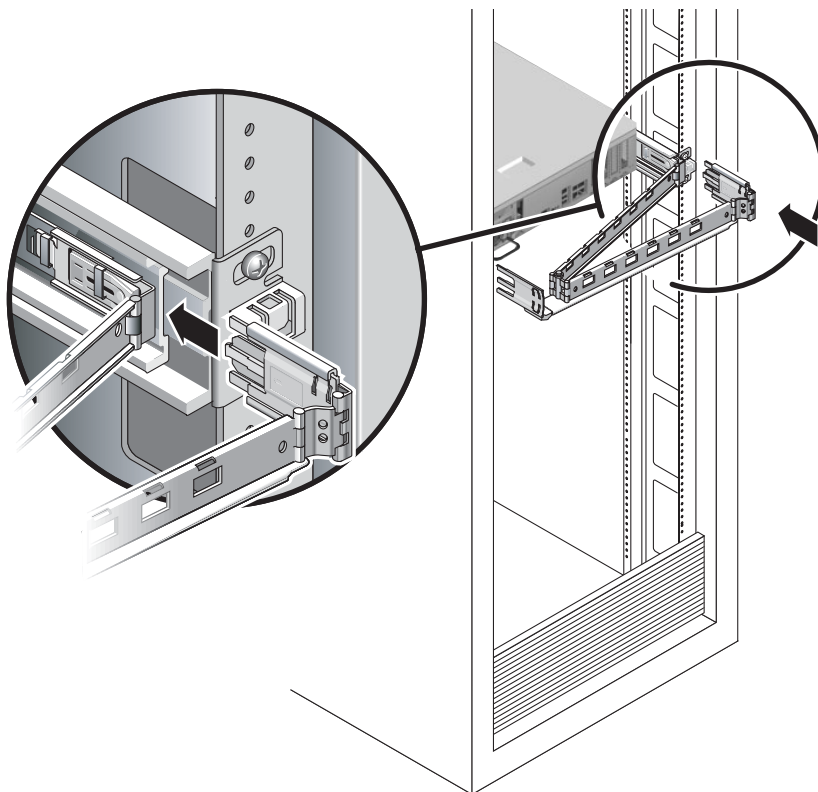


図 2-10 外部 CMA コネクタの取り付け

4. CMA の左側にあるヒンジ付きのプラスチック製のコネクタを、CMA レール拡張部品に完全に挿入します (図 2-11)。

CMA レール拡張部品のプラスチック製の爪によって、ヒンジ付きのプラスチック製のコネクタが適切な位置でロックされます。

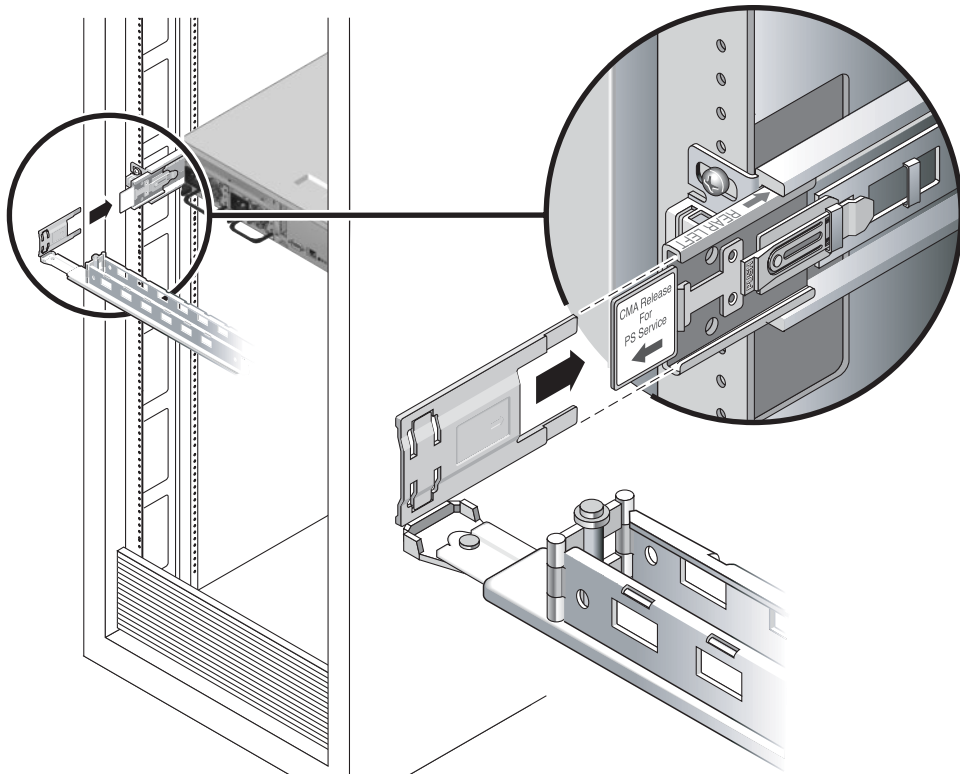


図 2-11 スライドレールの左側の取り付け

▼ スライドレールおよび CMA の動作を確認する

参考 – この手順には 2 人の作業員が必要です。1 人がサーバをラックの中や外に移動し、もう 1 人はケーブルおよび CMA を監視します。

1. フリースタンド型のラックの場合は、転倒防止バーを配置します。
2. シャーシの右側および左側のスライドロックボタンのロックを解除して (図 2-12)、スライドレールが止まるまでサーバをゆっくりとラックから引き出します。

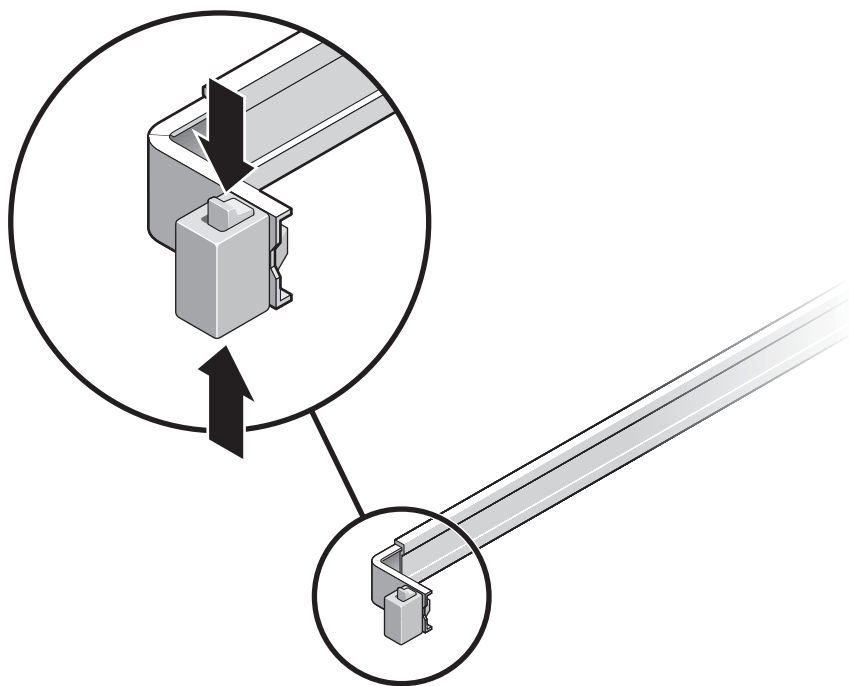


図 2-12 スライドレール構成部品のロックの解除

3. 接続されたケーブルが巻き付いたりねじれたりしていないかを確認します。
4. CMA が完全に伸び、スライドレールに巻き付いたりしないことを確認します。
5. サーバが完全に引き出され、保守の位置でロックされることを確認します。
サーバは、約 40 cm (15 インチ) 動かしたところで停止します。
6. 両方のスライドレールリリースボタンを同時に手前に引いて、サーバをスライドさせてラック内に戻します (図 2-13)。
サーバは、つかえることなく滑らかにラック内にスライドするはずです。

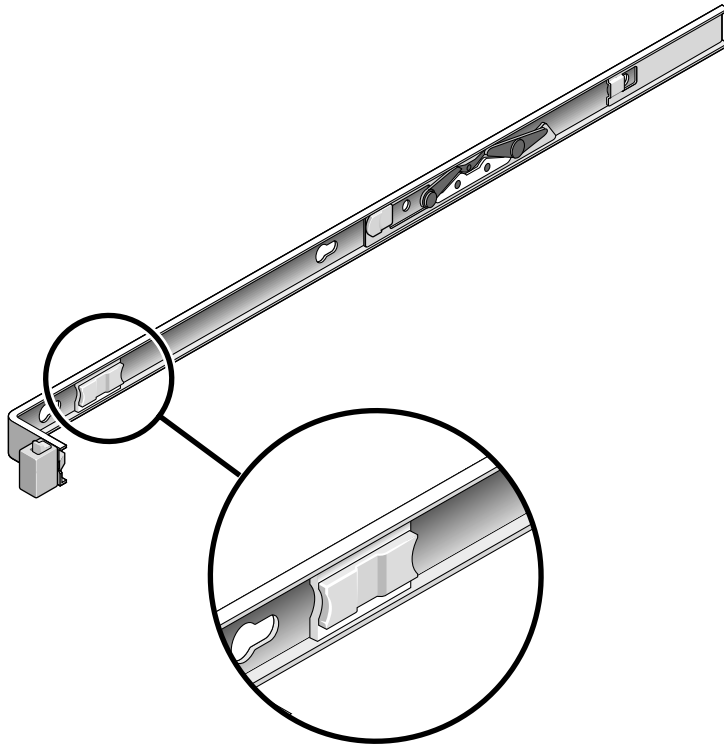


図 2-13 スライドレールのリリースボタン

7. CMA がつかえずに格納されていることを確認します。
8. 必要に応じて、ケーブルハンガーおよび CMA を調整します。
詳細は、30 ページの「CMA を使用したケーブルの管理」を参照してください。

サーバの取り外し

サーバをラックから取り外したり、保守またはハードウェアの更新のためにサーバを開けることが必要になった場合は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ サービス マニュアル』で手順を参照してください。

サーバへのケーブルの接続

- 26 ページの「Ethernet ネットワークケーブルに接続する」
- 28 ページの「SC ネットワーク管理ポートに接続する」
- 27 ページの「SC シリアル管理ポートに接続する」
- 29 ページの「AC 電源ケーブル」

さらに、SPARC Enterprise T2000 サーバには、オプションデバイスへの接続に使用できるシリアルポートおよび USB ポートがあります。

- 29 ページの「TTYA シリアルポート」
- 30 ページの「USB ポート」

注 – サーバへのケーブルの接続が完了したら、ケーブルが巻き付いたり損傷したりすることなく、サーバをスライドさせてラックから滑らかに出し入れできることを確認してください。詳細は、22 ページの「スライドレールおよび CMA の動作を確認する」のセクションを参照してください。

コネクタの場所

図 2-14 を参照して、サーバの背面にあるコネクタおよび電源装置の位置を確認します。

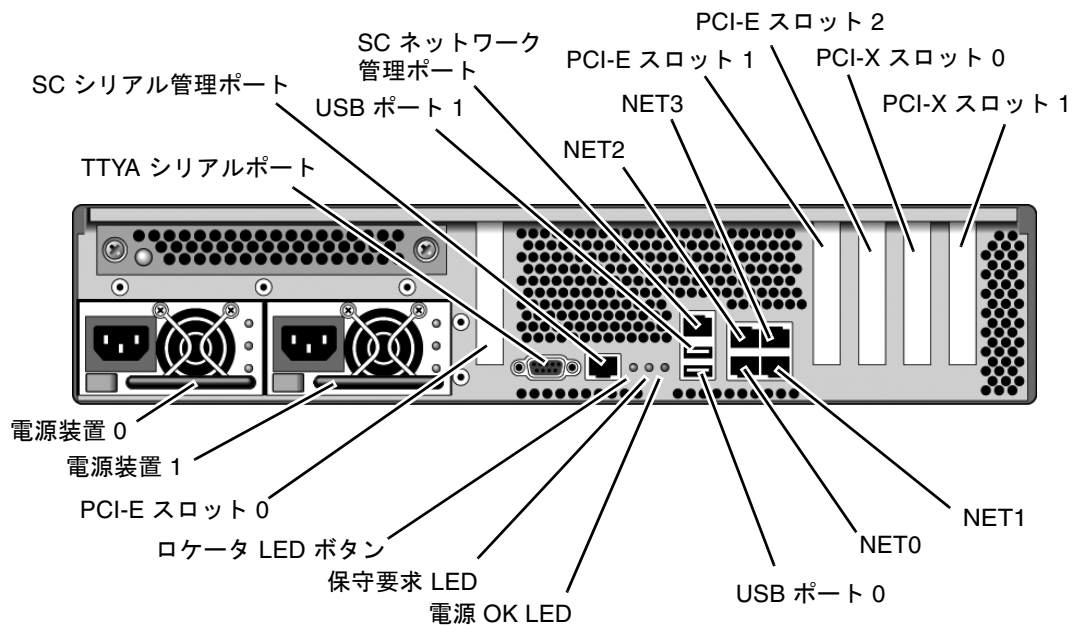


図 2-14 背面パネルの機能

USB ポート 2 および 3 はフロントパネルにあります (図 2-15)。

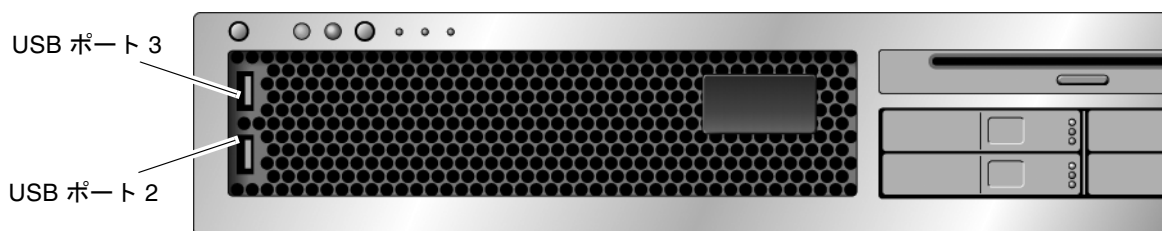


図 2-15 フロントパネルの USB ポート

▼ Ethernet ネットワークケーブルに接続する

サーバには、RJ-45 ギガビット Ethernet ネットワークコネクタが 4 つあります。これらのコネクタには、NET0、NET1、NET2、および NET3 というマークが付いています (図 2-16)。

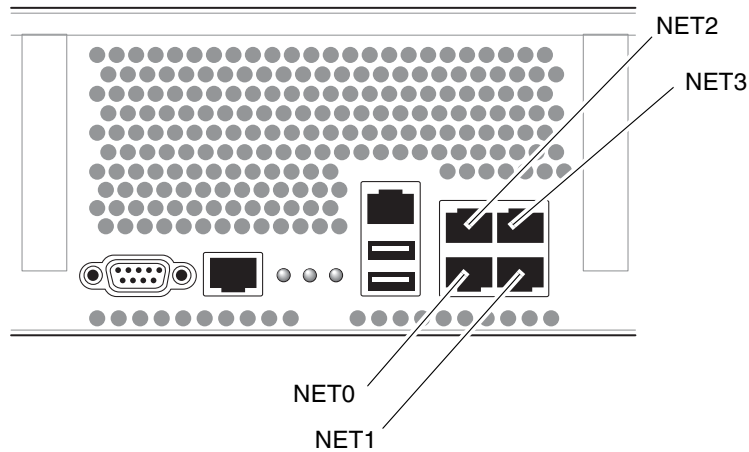


図 2-16 Ethernet ネットワーク接続

1. カテゴリ 5 ケーブルをネットワークスイッチまたはハブからシャーシの背面にある Ethernet ポート 0 (NET0) に接続します。
2. 必要に応じて、カテゴリ 5 ケーブルをネットワークスイッチまたはハブから残りの Ethernet ポート (NET1、NET2、NET3) に接続します。

▼ SC シリアル管理ポートに接続する

SC シリアル管理ポートには、SER MGT とマークが付いています。このポートはシャーシの背面にある一番左の RJ-45 ポートです (図 2-17)。

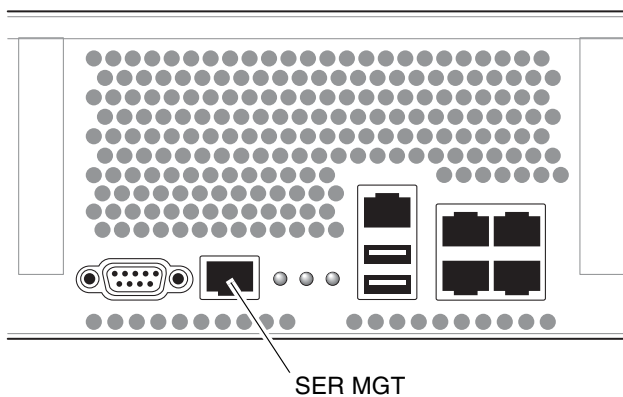


図 2-17 システムコントローラのシリアル接続

このポートはサーバの管理に使用します。このポートは、37 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする方法」に記載されているように、SC ネットワーク管理ポートを設定するために必要になります。

注 – サーバの管理には、SC シリアル管理ポートのみを使用します。これは、システムコントローラと端末またはコンピュータとのデフォルトの接続です。



注意 – このポートにモデムを接続しないでください。

- カテゴリ 5 ケーブルを SC シリアル管理ポートから端末デバイスに接続します。

DB-9 または DB-25 ケーブルのいずれかを接続する場合は、アダプタを使用して、各コネクタに指定されているクロス接続を実行してください。

▼ SC ネットワーク管理ポートに接続する

SC ネットワーク管理ポートには、NET MGT とマークが付いています。このポートは、背面の USB ポートの上にある RJ-45 ポートです。

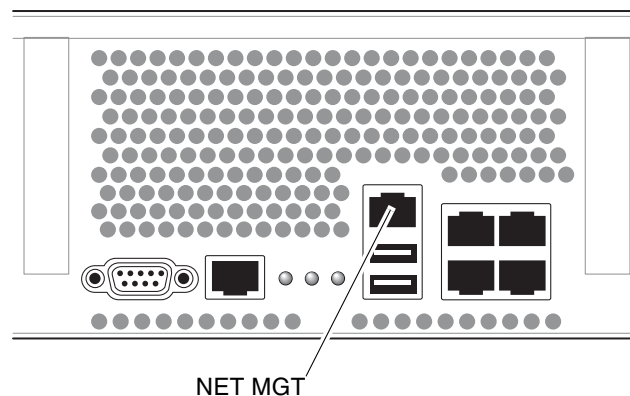


図 2-18 システムコントローラのネットワーク接続

- カテゴリ 5 ケーブルをネットワークスイッチまたはハブからネットワーク管理ポートに接続します。

注 – 39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」に記載されているように、シリアル管理ポートを介してネットワーク設定を構成するまで、このポートは動作しません。

注 – SC ネットワーク管理ポートは、デフォルトでは動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を介してネットワーク設定を取得し、Solaris Secure Shell (SSH[®]) を使用した接続を許可するように構成されています。使用しているネットワークのこれらの設定の変更が必要になる可能性があります。手順は第 3 章で説明します。

AC 電源ケーブル

注 – この章のハードウェアに関する手順を完了させてください。ただし、AC 電源ケーブルはまだ接続しないでください。

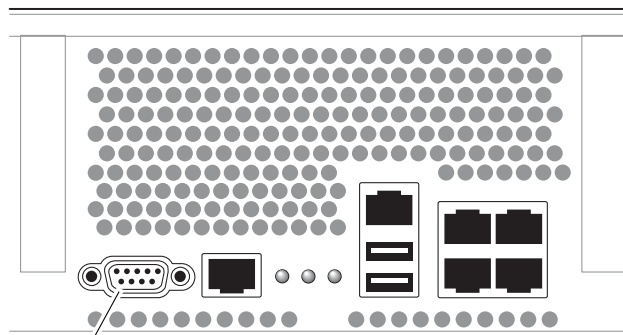
システムの電源をはじめて入れるときには、特別な準備および手順が必要です。たとえば、AC 電源ケーブルを接続する前にディスプレイを準備していないと、システムメッセージが失われる可能性があります。サーバを AC 電源に接続する手順は、33 ページの「はじめてのシステムの電源投入」に記載されています。



注意 – AC 電源ケーブルを電源に接続するとすぐに、サーバがスタンバイモードになり、システムコントローラが初期化されます。

TTYA シリアルポート

TTYA シリアルポートコネクタでは DB-9 コネクタを使用します (図 2-19 の項目 1)。このポートは、汎用シリアルデータの転送に使用してください。このポートは、SC シリアル管理ポートには接続されません。



シリアルポート (TTYA)

図 2-19 シリアルポート

各コネクタに指定されたクロスオーバーを実行するには、ヌルモデムケーブルまたはアダプタを使用します。

- パーソナルコンピュータのシリアルポートに接続する場合は、Sun アダプタパーツ番号 530-3100-01 を使用できます。
- Sun のワークステーションまたはサーバに接続する場合は、Sun アダプタパーツ番号 530-2889-03 を使用できます。

USB ポート

サーバには、4 つのユニバーサルシリアルバス (USB) ポートが提供されています。USB ポート 0 および 1 はシャーシの背面にあります (図 2-14)。ポート 2 および 3 はシャーシの前面にあります (図 2-15)。

CMA を使用したケーブルの管理

▼ ケーブルクリップの開閉を行う

1. ケーブルクリップを開くには、ケーブルクリップの前面を押して、ヒンジが付いた先端部を持ち上げます。
2. ケーブルをクリップに通してから、ケーブルクリップの先端部を押してロックします。

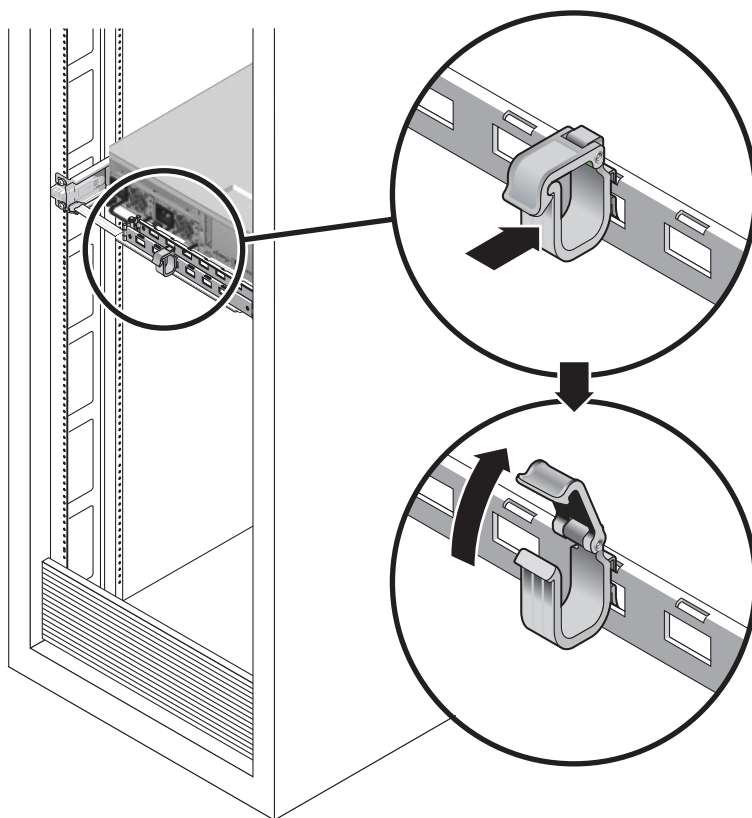


図 2-20 ケーブルクリップを開く

▼ ケーブルクリップを移動する

1. CMA アームからケーブルクリップを取り外すには、ケーブルクリップを 10 mm (3/8 インチ) ほど持ち上げて下のクリップのロックを外してから、クリップ全体を約 90 度回転させて上のクリップのロックを外します。

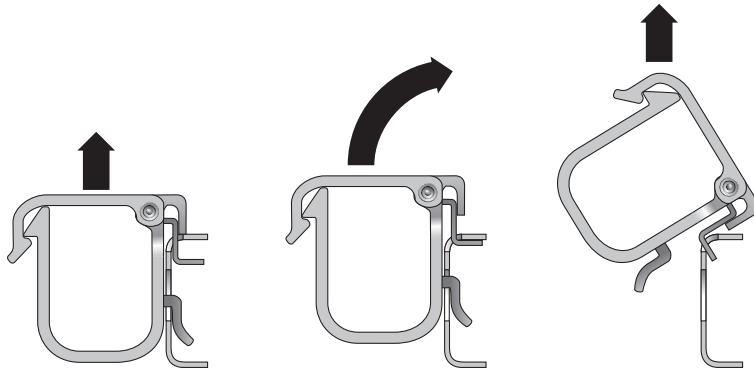


図 2-21 ケーブルクリップの取り外し

2. ケーブルクリップを挿入するには、上下のクリップロックを CMA アームのスロットの位置に合わせてから、クリップを 10 mm (3/8 インチ) ほど押し下げます。

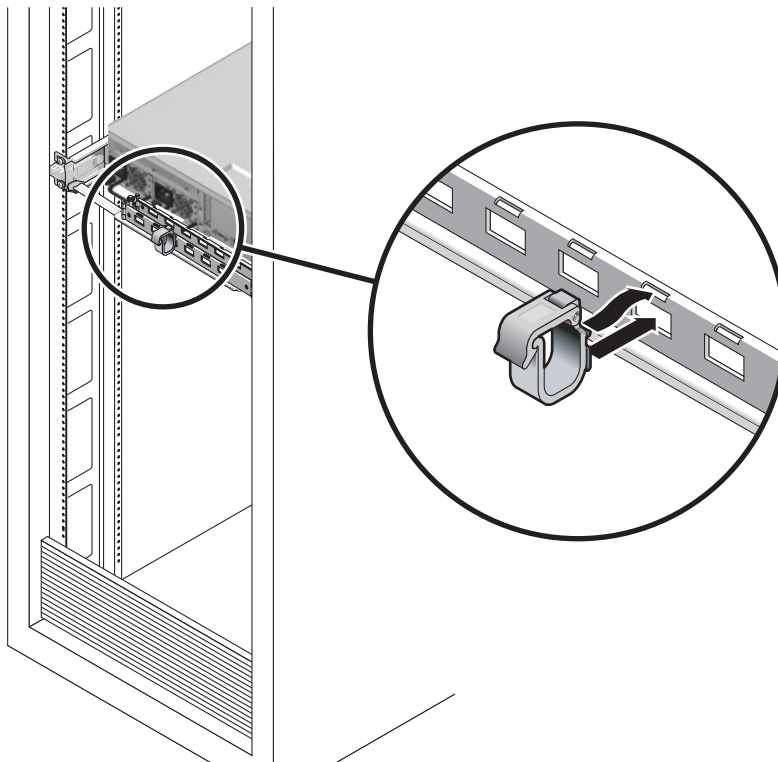


図 2-22 ケーブルクリップの取り付けまたは移動

第3章

システムの電源投入

この章では、サーバを起動し、システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする手順について説明します。

この章は、次のセクションで構成されています。

- 33 ページの「はじめてのシステムの電源投入」
- 37 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする方法」
- 38 ページの「システムコントローラへのログイン」
- 44 ページの「一般的な処理でのシステムコントローラの使用」
- 47 ページの「Solaris オペレーティングシステムの起動」
- 50 ページの「システムの機能の確認」

はじめてのシステムの電源投入

電源投入の概要

システムコンソール

システムの電源を入れると、システムコンソールの制御下で起動処理が開始されま
す。システムコンソールは、システムの起動中に、ファームウェアベースのテストに
よって生成された状態メッセージおよびエラーメッセージを表示します。

注 – これらの状態メッセージおよびエラーメッセージを参照するには、端末または端末エミュレータをシリアル管理ポート (SERIAL MGT) に接続してください。端末または端末エミュレータの基本的な接続手順については、35 ページの「はじめてシステムの電源を入れる」を参照してください。

システムコンソールの構成および端末の接続に関する詳細は、『Sun SPARC Enterprise T1000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。

ALOM CMT システムコントローラ

システムコンソールによる低レベルのシステム診断が完了すると、ALOM CMT システムコントローラが初期化され、より高いレベルの診断が実行されます。シリアル管理ポートに接続されているデバイスを使用して ALOM CMT システムコントローラにアクセスすると、ALOM CMT 診断の出力が表示されます。

ネットワーク管理ポートは、デフォルトでは、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を介して自動的にネットワーク構成を取得し、Secure Shell (SSH) を使用した接続を許可するように構成されています。

注 – 使用しているネットワーク上で DHCP および SSH を使用できない場合は、シリアル管理ポートを使用して ALOM CMT システムコントローラに接続し、ネットワーク管理ポートを再構成してください。詳細は、39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」を参照してください。

ネットワーク管理ポート (NET MGT) に IP アドレスが割り当てられると、Telnet または SSH を使用して ALOM CMT システムコントローラに接続できます。

パスワード

シリアル管理ポートを使用して ALOM CMT システムコントローラにはじめて接続する場合、デフォルトのパスワードはありません。admin パスワードを設定するには、44 ページの「ネットワーク管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。

ネットワーク管理ポートを使用して ALOM CMT システムコントローラにはじめて接続する場合のデフォルトのパスワードは、シャーシのシリアル番号の下 8 桁になります。シリアル番号はサーバの背面に示されています。また、サーバに付属するシステムの情報シートにも印刷されています。

▼ はじめてシステムの電源を入れる



参考 – 電源ケーブルを接続する前にシリアル端末または端末エミュレータが接続されていないと、システムメッセージを確認できません。AC 電源ケーブルを電源に接続するとすぐに、サーバがスタンバイモードになり、ALOM CMT システムコントローラが初期化されます。

注 – ログインしない場合、ALOM CMT は 60 秒後にタイムアウトしてシステムコンソールに戻ります。ALOM CMT システムコントローラプロンプトに戻るには、**#.**を入力します。詳細は、『Advanced Lights Out Manager (ALOM) CMT ガイド』を参照してください。

システムコントローラは、3.3 V のスタンバイ電圧で動作します。システムに AC 電源が接続されるとすぐに、システムコントローラの電源が入り、診断が実行されて、ALOM CMT ファームウェアが初期化されます。

1. 端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) を SC シリアル管理ポートにまだ接続していない場合は、これを接続します。端末または端末エミュレータは次の設定で構成します。
 - 9600 ボー
 - 8 ビット
 - パリティなし
 - 1 ストップビット
 - ハンドシェイクなし

注 – サーバにはじめて電源を入れるときに端末または端末エミュレータ (PC またはワークステーション) が SC シリアル管理ポートに接続されていないと、システムメッセージを確認できません。この表示は、約 60 秒後にタイムアウトして消えます。端末または端末エミュレータを介してサーバに接続したあと、**#.**を入力して、システムコントローラのコンソールを表示します。

2. 端末または端末エミュレータをオンにします。
3. AC 電源ケーブルを電源装置 0 および電源装置 1 に接続し、端末でシステムメッセージを監視します。

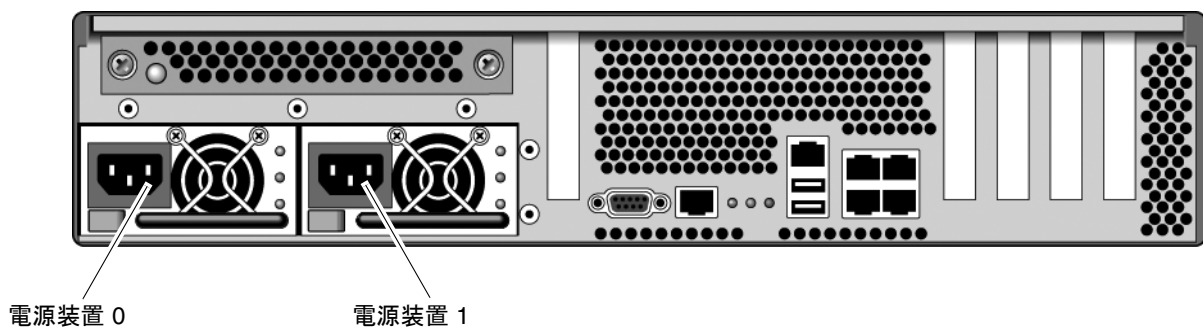


図 3-1 背面パネルの電源コネクタ

システムコントローラが起動すると、シリアルコンソールにシステムコントローラのログインプロンプトが表示されます。次の例は、ログインプロンプトが表示されるまでの、システムコントローラの起動手順の出力の一部を示しています。

コード例 3-1 システムコントローラのサンプル出力

```
ALOM POST 1.x

Dual Port Memory Test, PASSED.

TTY External - Internal Loopback Test
      TTY External - Internal Loopback Test, PASSED.

TTYC - Internal Loopback Test
      TTYC - Internal Loopback Test, PASSED.

TTYD - Internal Loopback Test
      TTYD - Internal Loopback Test, PASSED.

.....

Full VxDiag Tests - PASSED

      Status summary - Status = 7FFF

      VxDiag - - PASSED
      POST - - PASSED
```

コード例 3-1 システムコントローラのサンプル出力 (続き)

```
LOOPBACK - - PASSED

I2C - - PASSED
EPROM - - PASSED
FRU PROM - - PASSED

ETHERNET - - PASSED
MAIN CRC - - PASSED
BOOT CRC - - PASSED

TTYD - - PASSED
TTYC - - PASSED
MEMORY - - PASSED
MPC885 - - PASSED

Please login:
```

注 - 60 秒以内にユーザーからの入力がなければ、ALOM CMT システムコントローラのコンソールは自動的にシステムコンソールに接続します。

システムコントローラのネットワーク管理ポートを使用可能にする方法

システムコントローラのネットワーク管理ポートは、システムコントローラのネットワーク設定を構成するまで動作しません。次の手順に従って、システムコントローラを設定します。

1. システムコントローラの起動後に、シリアル管理ポートを介して ALOM CMT コマンド行インタフェースにアクセスします。詳細は、38 ページの「シリアル管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。
2. システムコントローラを設定します。詳細は、39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」を参照してください。
3. システムコントローラをリセットして、新しい値を有効にします。詳細は、42 ページの「システムコントローラをリセットする」を参照してください。

これで、SP ネットワーク管理ポートを使用して、いつでもシステムコントローラにアクセスすることができます。詳細は、44 ページの「ネットワーク管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。

システムコントローラへのログイン

システムの取り付け後にはじめてシステムの電源を入れる場合は、システムコントローラのシリアルポートを使用して、システムの電源を入れて POST を実行します。詳細は、38 ページの「シリアル管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。

ネットワーク管理ポートがすでに設定されている場合は、シリアル管理ポートの代わりにネットワーク管理ポートを使用できます。詳細は、44 ページの「ネットワーク管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする」を参照してください。

▼ シリアル管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする

システムコントローラが起動すると、ALOM CMT コマンド行インタフェースにアクセスして、システムの設定および管理を行うことができます。

システムコントローラをはじめて起動したときに、sc プロンプトが表示されます。デフォルトの設定では、admin と呼ばれる ALOM CMT ユーザーアカウントが提供されています。デフォルトのパスワードが指定されていないため、システムコントローラ (sc) の password コマンドを使用してパスワードを作成する必要があります。

1. システムにはじめて電源を入れる場合は、password コマンドを使用して admin のパスワードを設定します。

```
.....  
TTYD - - PASSED  
TTYC - - PASSED  
MEMORY - - PASSED  
MPC885 - - PASSED  
sc> password  
password: Changing password for admin  
Setting password for admin.  
New password: new_password  
  
Re-enter new password: new_password  
  
sc>
```

admin のパスワードを設定すると、それ以降の再起動では sc ログインプロンプトが表示されます。

2. ログイン名として admin を入力し、続けてパスワードを入力します。

```
TTYD - - PASSED  
TTYC - - PASSED  
MEMORY - - PASSED  
MPC885 - - PASSED  
Please login: admin  
Please Enter password: password  
(2 回 Return を押す)  
  
sc>
```

▼ システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する

注 - 使用しているネットワークで DHCP および SSH が使用できる場合は、はじめてシステムを起動するときにこの構成が自動的に実行されます。

この手順は、次の条件に該当する場合にのみ実行してください。

- 使用しているネットワークで DHCP および SSH が使用できない場合。
- SC ネットワーク管理ポートの設定を変更する必要がある場合。

この手順では、シリアル管理ポートを使用して ALOM CMT システムコントローラに接続し、ネットワーク管理ポートを手動で再構成します。

注 – ALOM CMT の構成の詳細は、『Advanced Lights Out Management (ALOM) CMT ガイド』を参照してください。

使用しているネットワーク構成の詳細に従って、次のネットワークパラメータを設定します。

- `if_network` – SC がネットワーク上に存在するかどうかの指定
- `netsc_ipaddr` – システムコントローラの IP アドレス
- `netsc_ipgateway` – サブネットのゲートウェイの IP アドレス
- `netsc_ipnetmask` – システムコントローラサブネットのネットマスク

これらのパラメータを設定するには、`setsc` コマンドを使用します。使用法は次のとおりです。

```
sc> setsc parameter
```

1. `if_network` パラメータを `true` に設定します。

```
sc> setsc if_network true
```

2. `if_connection` パラメータを、`telnet` または `ssh` のいずれかの接続タイプに設定します。

```
sc> setsc if_connection value
```

`value` には、次のいずれかの値を指定できます。

- `none`
- `telnet`
- `ssh`
- `netsc_dhcp` (システムコントローラが DHCP サーバを介してそのネットワークインタフェース構成を取得する)

ALOM CMT での SSH のサポートの詳細は、『Advanced Lights Out Management (ALOM) CMT ガイド』を参照してください。

3. ネットワーク管理者に確認して、次のシステムコントローラの構成方法のどちらかを選択します。
 - DHCP を使用してネットワーク設定を取得します。手順 4 に進みます。
 - 静的 IP 構成を設定します。手順 5 に進みます。

4. DHCP を使用する場合は、`netsc_dhcp` を `true` に設定します。

```
sc> setsc netsc_dhcp true
```

手順 6 に進みます。

5. 静的 IP 構成を使用する場合は、パラメータ `netsc_ipaddr`、`netsc_ipgateway`、および `netsc_ipnetmask` を、次のように設定します。
- a. システムコントローラの IP アドレスを設定します。

```
sc> setsc netsc_ipaddr service-processor-IPAddr
```

- b. システムコントローラゲートウェイの IP アドレスを設定します。

```
sc> setsc netsc_ipgateway gateway-IPAddr
```

- c. システムコントローラのネットマスクを設定します。

```
sc> setsc netsc_ipnetmask 255.255.255.0
```

この例では、`255.255.255.0` を使用してネットマスクを設定します。ご使用のネットワーク環境のサブネットでは、異なるネットマスクが必要になる場合があります。使用している環境にもっとも適したネットマスク番号を使用してください。

6. `showsc` コマンドを使用して、パラメータが適切に設定されたことを確認します。

```
sc> showsc  
Advanced Lights Out Manager CMT v1.x  
  
parameter                value  
-----                -  
if_network                true  
if_connection            ssh  
if_emailalerts           false  
netsc_dhcp               true  
netsc_ipaddr             xxx.xxx.xxx.xxx  
netsc_ipnetmask          255.255.255.0  
netsc_ipgateway          0.0.0.0  
mgt_mailhost  
mgt_mailalert  
sc_customerinfo
```

sc_escapechars	#.
sc_powerondelay	false
sc_powerstatememory	false
sc_clipasswdecho	true
sc_cliprompt	sc
sc_clitimeout	0
sc_clieventlevel	2
sc_backupuserdata	true
diag_trigger	power-on-reset error-reset
diag_verbosity	normal
diag_level	max
diag_mode	normal
sys_autorunonerror	false
ser_baudrate	9600
ser_parity	none
ser_stopbits	1
ser_data	8
netsc_enetaddr	xx:xx:xx:xx:xx:xx
sys_enetaddr	yy:yy:yy:yy:yy:yy

注 – 構成パラメータを設定したあとで、システムコントローラをリセットして新しい値を有効にする必要があります。詳細は、42 ページの「システムコントローラをリセットする」を参照してください。

▼ システムコントローラをリセットする

すべての構成パラメータが設定されたあとで、システムコントローラをリセットして新しい値を有効にする必要があります。

- **resetsc コマンドを実行します。**

システムコントローラをリセットすることを確認するプロンプトが表示されます。プロンプトが表示されたら、**y** と応答します。

```
sc> resetsc
Are you sure you want to reset the SC [y/n]? y
User Requested SC Shutdown
```

注 – resetsc コマンドに **-y** フラグを指定すると、確認メッセージを省略できます。

システムコントローラがリセットされ、診断が実行されます。その後、ログインプロンプトに戻ります。

```
ALOM POST 1.x

Dual Port Memory Test, PASSED.

TTY External - Internal Loopback Test
      TTY External - Internal Loopback Test, PASSED.

TTYC - Internal Loopback Test
      TTYC - Internal Loopback Test, PASSED.

TTYD - Internal Loopback Test
      TTYD - Internal Loopback Test, PASSED.

.....
Full VxDiag Tests - PASSED

Status summary - Status = 7FFF

VxDiag      -      - PASSED
POST        -      - PASSED
LOOPBACK    -      - PASSED

I2C         -      - PASSED
EPROM       -      - PASSED
FRU PROM    -      - PASSED

ETHERNET    -      - PASSED
MAIN CRC    -      - PASSED
BOOT CRC    -      - PASSED

TTYD        -      - PASSED
TTYC        -      - PASSED
MEMORY      -      - PASSED
MPC885      -      - PASSED

Please login:
```

▼ ネットワーク管理ポートを使用してシステムコントローラにログインする

注 – ネットワーク管理ポートを使用する前に、39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」を参照して、システムコントローラのパラメータを設定する必要があります。

1. Telnet セッションを開き、ネットワークアドレスを指定してシステムコントローラに接続します。

```
% telnet x.x.x.x.  
Trying x.x.x.x ...  
Connected to x.x.x.x.  
Escape character is '^]'.  
Copyright 2003 Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.  
Use is subject to license terms.  
Sun(tm) Advanced Lights Out Manager 1.x  
Please login:
```

2. 以前に設定したパスワードを使用して、admin でログインします。

```
Please login: admin  
Please Enter password: password  
sc>
```

一般的な処理でのシステムコントローラの使用

▼ システムの電源を入れる

システムの電源を入れるには、SC コンソールで `poweron` コマンドを使用する必要があります。

- 電源投入シーケンスを開始するには、`poweron` コマンドを実行します。

システムコンソールに `sc>` 警告メッセージが表示されます。これは、システムがリセットされたことを示しています。

```
sc> poweron
SC Alert: Host System has Reset
sc>
```

▼ システムコンソールに接続する

POST、OpenBoot、および Solaris OS からの出力は、システムコントローラのネットワークコンソールを使用してシステムコンソールに表示されます。

- `console` コマンドを実行し、`-f` オプションを使用して、使用しているセッションにコンソールを強制的に接続します。

コンソールには複数のユーザーが接続できますが、1人のユーザーのみがセッションに参加することができます。

```
sc> console -f
Enter #. to return to ALOM.
```

注 – POST 出力の詳細は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ サービスマニュアル』を参照してください。

▼ システムの正常な初期化を実行する

`poweron` コマンドを実行すると、CPU およびメモリーコントローラが初期化され、最後には OpenBoot が初期化されます。多くのシステムコンソールのメッセージが表示されたあとで、`ok` プロンプトが表示されるか、システムが Solaris OS で起動します。

注 – システムの動作は `auto-boot` 変数の設定方法によって異なります。詳細は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ サービスマニュアル』を参照してください。

次の出力例は、完全な出力の一部分です。

```

Find dropin, Copying Done, Size 0000.0000.0000.1110
Find dropin, (copied), Decompressing Done, Size
0000.0000.0006.06e0 ^Qcpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu
cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu cpu
cpu vpci mem32base, mem64base, cfgbase: e800000000 e000000000
e900000000
pci /pci@780: Device 0 pci pci
/pci@780/pci@0: Device 0 Nothing there
/pci@780/pci@0: Device 1 pci pci

.....

/pci@7c0/pci@0: Device a Nothing there
/pci@7c0/pci@0: Device b Nothing there
/pci@7c0/pci@0: Device c Nothing there
/pci@7c0/pci@0: Device d Nothing there
/pci@7c0/pci@0: Device e Nothing there
/pci@7c0/pci@0: Device f Nothing there
Probing I/O buses

SPARC Enterprise T2000, No Keyboard
...

{0} ok

```

OpenBoot デバイスツリーに表示されている各種デバイスとそれらのパス名を理解するには、表 3-1 を参照してください。この表には、各デバイス、そのフルパス名、およびデバイスの物理的な場所を識別するために使用される場所または NAC の名前が示されています。

表 3-1 デバイス、OpenBoot パス名、および場所の割り当て

OpenBoot デバイスパス名	デバイス	場所名
/pci@780	Fire IO ブリッジバス A	IOBD/PCIEa
/pci@780/pci@0	PLX 8532 PCI-E スイッチ A (U0901)	IOBD/PCI-SWITCH0
/pci@780/pci@0/pci@1	Intel Ophir GBE チップ (U2401)	IOBD/GBE0
/pci@780/pci@0/pci@8	PCI-E スロット 0 (J2100)	PCIE0
/pci@780/pci@0/pci@9	LSI 1064-E SAS コントローラ (U3401)	IOBD/SASHBA
/pci@7c0	Fire IO ブリッジバス B	IOBD/PCIEb

表 3-1 デバイス、OpenBoot パス名、および場所の割り当て (続き)

OpenBoot デバイスパス名	デバイス	場所名
/pci@7c0/pci@0	PLX 8532 PCI-E スイッチ B (U1501)	IOBD/PCI-SWITCH1
/pci@7c0/pci@0/pci@2	Intel Ophir GBE チップ (U2601)	IOBD/GBE1
/pci@7c0/pci@0/pci@1	Intel 41210 ブリッジチップ (U2901)	IOBD/PCI-BRIDGE
/pci@7c0/pci@0/pci@1/pci@0,2	PCI-X スロット 0 (J3201)	PCIX0
/pci@7c0/pci@0/pci@1/pci@0,2	PCI-X スロット 1 (J3301)	PCIX1
/pci@7c0/pci@0/pci@1/pci@0,2	ULI Southbridge チップ (U3702)	IOBD/PCIX-IO
/pci@7c0/pci@0/pci@9	PCI-E スロット 2 (J2202)	PCIE2
/pci@7c0/pci@0/pci@8	PCI-E スロット 1 (J2201)	PCIE1

Solaris オペレーティングシステムの起動

Solaris OS は、スロット 0 のディスクでサーバにプリインストールされています。Solaris OS は構成されていません。つまり、出荷時に `sys-unconfig` コマンドが実行されています。このディスクからシステムを起動すると、使用している環境に合わせて Solaris OS を構成するように求めるプロンプトが表示されます。

▼ Solaris オペレーティングシステムを起動する

1. ok プロンプトで、Solaris OS を含むディスクから起動します。
起動のディスクがわかっている場合は、手順 a をスキップして手順 2 を実行します。
 - a. 起動元のディスクを判定する必要がある場合は、次のように ok プロンプトで `show-disks` コマンドを実行して、構成されているディスクのパスを確認します。

```
ok show-disks
a) /pci@7c0/pci@0/pci@2/pci@0,2/LSILogic,sas@4/disk
q) NO SELECTION
Enter Selection, q to quit: q
ok
```

2. ok プロンプトで `boot` コマンドを入力します。

手順 1 の値を使用して、boot コマンドを作成します。ディスクパスにターゲットを追加する必要があります。次の例では、システムがディスク 0 (ゼロ) から起動されるため、ディスクパスに @0,0 が追加されています。

```
ok boot /pci@7c0/pci@0/pci@2/pci@0,2/LSILogic,sas@4/disk@0,0
Boot device: / pci@7c0/pci@0/pci@2/pci@0,2/LSILogic,sas@4/
disk@0,0
File and args:
Notice: Unimplemented procedure 'encode-unit' in
/pci@7c0/pci@0/pci@2/pci@0/LSILogic,sas@4
Loading ufs-file-system package 1.4 04 Aug 1995 13:02:54.
FCode UFS Reader 1.12 00/07/17 15:48:16.
Loading: /platform/SUNW,Ontario/ufsboot
Loading: /platform/sun4v/ufsboot
SunOS Release 5.10 Version
/net/spa/export/spa2/ws/pothier/grlks10-ontario:12/01/2004 64-bit
...

DEBUG enabled
misc/forthdebug (159760 bytes) loaded
/platform/sun4v/kernel/drv/sparcv9/px symbol
intr_devino_to_sysino multiply defined
...
os-tba FPU not in use
configuring IPv4 interfaces: ipge0.
Hostname: wgs94-181
The system is coming up. Please wait.
NIS domain name is xxx.xxx.xxx.xxx
starting rpc services: rpcbind keyserver ypbind done.
Setting netmask of lo0 to 255.0.0.0
Setting netmask of bge0 to 255.255.255.0
Setting default IPv4 interface for multicast: add net 224.0/4:
gateway wgs94-181
syslog service starting.
volume management starting.
Creating new rsa public/private host key pair
Creating new dsa public/private host key pair
The system is ready.
wgs94-181 console login:
```

▼ システムをリセットする

- システムをリセットする必要がある場合は、`init 6` コマンドを使用します。

```
# init 6
```

システムを単にリセットするには、システムの電源を再投入する必要はありません。

▼ システムの電源を再投入する

単純なリセットでシステムの問題が解決されない場合は、次の手順に従ってシステムの電源を再投入します。

1. Solaris OS を停止します。

Solaris OS プロンプトで、`init 0` コマンドを実行して Solaris OS を停止し、`ok` プロンプトに戻ります。

```
# init 0
WARNING: proc_exit: init exited
syncing file systems... done
Program terminated
ok
```

2. `#` エスケープシーケンスを実行して、システムコンソールプロンプトから `SC` コンソールプロンプトに切り替えます。

```
ok #.
sc>
```

3. `SC` コンソールを使用して `poweroff` コマンドを実行します。

```
sc> poweroff -fy
SC Alert: SC Request to Power Off Host Immediately.
```

4. `poweron` コマンドを実行します。

```
sc> poweron
sc> SC Alert: Host System has Reset
```

5. コンソールコマンドを使用して、システムコンソールに再接続します。

```
sc> console -f  
Enter #. to return to ALOM.
```

さまざまなメッセージのあとに ok プロンプトが表示されます。

システムの機能の確認

はじめてシステムに電源を入れたあと、SunVTS™ ソフトウェアを使用して、ネットワーク接続だけでなく、インストールされているコンポーネントの機能およびパフォーマンスも確認できます。詳細は、SunVTS のマニュアルを参照してください。

ファームウェアの更新

flashupdate コマンドでは、システムコントローラファームウェアおよびサーバファームウェアの両方が更新されます。

フラッシュイメージは、次のコンポーネントで構成されます。

- システムコントローラファームウェア
- OpenBoot
- POST
- Reset/Config
- シーケンサ
- パーティションの説明

ファームウェアの更新

以降のファームウェアリリースでの機能や修正を使用するには、次の手順を実行します。

▼ ファームウェアを更新する

1. ALOM CMT システムコントローラのネットワーク管理ポートが構成されていることを確認してください。

これは、ネットワークを介して新しいフラッシュイメージにアクセスするために必要になります。詳細は、39 ページの「システムコントローラのネットワーク管理ポートを構成する」を参照してください。

2. Telnet または SSH セッションを開き、システムコントローラに接続します。
Telnet の例を次に示します。

```
% telnet xxx.xxx.xx.xx
Trying xxx.xxx.xx.xx...
Connected to xxx.xxx.xx.xx.
Escape character is '^]'.

Use is subject to license terms.

Sun(tm) Advanced Lights Out Manager CMT v1.x

Please login:
```

3. システムコントローラの設定時に定義したパスワードを使用して、admin でログインします。

```
Please login: admin
Please Enter password: password
sc>
```

4. flashupdate コマンドを実行します。

SC コマンドの flashupdate は、システムコントローラのフラッシュイメージおよびホストファームウェアを更新します。flashupdate コマンドには、次の情報が必要です。

- フラッシュイメージにアクセスできる、ネットワーク上の FTP サーバの IP アドレス
- IP アドレスがアクセスできる、フラッシュイメージのフルパス名
- IP アドレスで指定されるシステムに登録されているアカウントのユーザー名およびパスワード

このコマンドの使用法は、次のとおりです。

```
flashupdate [-s IPaddr -f pathname] [-v]
```

ここでは、次のように指定します。

- *-s IPaddr* は、フラッシュイメージにアクセスできる、ネットワーク上の FTP サーバの IP アドレスです
- *-f pathname* は、フラッシュイメージのフルパス名です

- `-v` は、冗長メッセージ出力をオンに設定するためのフラグです

```
sc> flashupdate -s xxx.xxx.xx.xx -f pathname
Username: username
Password: password
.....
Update complete. Reset device to use new image.
sc>
```

5. システムコントローラをリセットします。

フラッシュが更新されたら、システムコントローラをリセットして新しいイメージを有効にする必要があります。次に示すように、システムコントローラをリセットするには、`resetsc` コマンドを実行します。

注 - `resetsc` コマンドに `-y` フラグを使用すると、確認プロンプトを省略できます。Telnet または SSH セッションから `resetsc` が実行された場合は、リセット時に Telnet または SSH セッションが終了します。リセットからの出力は、システムコントローラのシリアルコンソールに表示されます。

```
sc> resetsc
Are you sure you want to reset the SC [y/n]? y
User Requested SC Shutdown
```

システムコントローラがリセットされ、診断が実行されます。その後、コード例 A-1 と同様にシリアルコンソールのログインプロンプトに戻ります。

コード例 A-1 ファームウェア更新後の標準的な起動手順

```
ALOM BOOTMON v1.x
ALOM Build Release: 000
Reset register: f0000000 EHRS ESRs LLRS SWRS

ALOM POST 1.x

Dual Port Memory Test, PASSED.

TTY External - Internal Loopback Test
TTY External - Internal Loopback Test, PASSED.

TTYC - Internal Loopback Test
TTYC - Internal Loopback Test, PASSED.
```

コード例 A-1 ファームウェア更新後の標準的な起動手順 (続き)

```
...  
  
ETHERNET CPU LOOPBACK TEST, PASSED  
  
Full VxDiag Tests - PASSED  
  
Status summary - Status = 7FFF  
  
VxDiag - - PASSED  
POST - - PASSED  
LOOPBACK - - PASSED  
  
I2C - - PASSED  
EPROM - - PASSED  
FRU PROM - - PASSED  
  
ETHERNET - - PASSED  
MAIN CRC - - PASSED  
BOOT CRC - - PASSED  
  
TTYD - - PASSED  
TTYC - - PASSED  
MEMORY - - PASSED  
MPC885 - - PASSED  
  
sc>
```


起動デバイスの選択

起動デバイスは、OpenBoot 構成変数 `boot-device` の設定によって指定されます。この変数のデフォルト設定は、`disk net` です。この設定によって、ファームウェアは最初にシステムハードドライブからの起動を試みます。この起動が失敗すると、システムボード上の NET0 ギガビット Ethernet インタフェースからの起動を試みません。

この手順は、OpenBoot ファームウェアに関する知識があり、OpenBoot 環境の起動方法を理解していることを前提としています。詳細は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。

注 – ALOM カードのシリアル管理ポートは、デフォルトのシステムコンソールポートとして事前構成されています。詳細は、『Sun SPARC Enterprise T2000 サーバ 製品概要』を参照してください。

ネットワークから起動する場合は、ネットワークへのネットワークインタフェースを接続する必要があります。

▼ 起動デバイスを選択する

- ok プロンプトで、次のように入力します。

```
ok setenv boot-device device-specifier
```

device-specifier には、次のいずれかの値を指定します。

- `cdrom` – DVD ドライブを指定する
- `disk` – システム起動ディスク (デフォルトでは内蔵ディスク 0) を指定する
- `disk0` – 内蔵ドライブ 0 を指定する
- `disk1` – 内蔵ドライブ 1 を指定する
- `disk2` – 内蔵ドライブ 2 を指定する

- `disk3` – 内蔵ドライブ 3 を指定する
- `net`、`net0`、`net1`、`net2`、`net3` – ネットワークインタフェースを指定する
- *full path name* – デバイスまたはネットワークインタフェースをフルパス名で指定する

注 – Solaris OS は、`boot-device` の変数をエイリアス名ではなくフルパス名に変更します。デフォルト以外の `boot-device` の変数を選択すると、Solaris OS では起動デバイスのフルデバイスパスが指定されます。

注 – 起動されるプログラムの名前とともに、起動プログラムの動作方法を指定できます。詳細は、使用している特定の Solaris OS リリースに関する OpenBoot Collection AnswerBook の『OpenBoot 4.x Command Reference Manual』を参照してください。

システムボード上の Ethernet インタフェース以外のネットワークインタフェースをデフォルトの起動デバイスとして指定する場合は、次のように入力して、各インタフェースのフルパス名を確認することができます。

```
ok show-devs
```

`show-devs` コマンドによってシステムデバイスが一覧表示され、各 PCI デバイスのフルパス名が表示されます。

索引

記号

- #. エスケープシーケンス、システムコンソール, 49
- ^] エスケープ文字、telnet, 44

A

- AC 電源ケーブルおよびスタンバイモード, 29
- admin ログイン、パスワードの設定, 39
- Advanced Lights Out Management、「ALOM CMT」を参照
- ALOM CMT
 - 管理マニュアル, xvi
 - コマンド行へのアクセス, 38
 - 「システムコントローラ」も参照
 - パスワード, 34
 - ログインしない場合の 60 秒後のタイムアウト, 35
- ALOM CMT コマンド行へのアクセス, 38

C

- CMA、「ケーブル管理部品」を参照
- console コマンド, 45, 50

D

- DB-9 TTY コネクタ, 7, 29

F

- flashupdate コマンド, 52

H

- <http://store.sun.com>, 2
- <http://www.sun.com/documentation>, xvi
- <http://www.sun.com/hwdocs/feedback>, xvii

I

- IP アドレス, 3

L

- LED、ポート、およびスロットの図, 5, 25

N

- NET0 ～ NET3 ポートの図, 25, 26

O

- OpenBoot PROM デバイスの割り当て, 46

P

password コマンド, 38
PCI-E、PCI-X スロットの場所、図, 25
poweroff コマンド, 49
poweron コマンド, 45, 49

R

resetsc コマンド, 42, 53
RJ-45 ケーブル, 6

S

SC シリアル管理ポートでのモデムの使用不可, 28
SC、「システムコントローラ」を参照
setsc コマンド, 40
show-disks コマンド, 47
showsc コマンド, 40, 41
Solaris オペレーティングシステムのオンラインマニユアル, xiv
Solaris メディアキットの内容, 5

T

Telnet セッション, 52
telnet セッション、開く, 44
Telnet セッションの場合の alternate コマンド, 52
telnet のエスケープ文字 ^], 44
TTYA シリアルポート, 7

U

uadmin コマンド, 49
USB ポートの図, 25, 26

W

Web サイト

<http://store.sun.com>, 2
<http://www.sun.com/documentation>, xvi
<http://www.sun.com/hwdocs/feedback>, xvii

あ

アドレス、IP, 3
アドレス、Web、「Web サイト」を参照

え

エスケープシーケンス #.、システムコンソール, 49
エスケープ文字 ^]、telnet, 44

お

お客様からのご意見およびご要望, xvii
オプションのコンポーネント、サービスマニユアルの取り付け手順、, 2
オプションのコンポーネントの取り付け, 2
オプションのコンポーネントリスト、オンライン, 2
オンラインリスト、オプションのコンポーネント, 2

か

間隔ツール、スライドレール, 17

き

起動
OpenBoot PROM boot コマンド, 47
Solaris OS の起動, 47
システムの起動, 33

け

ゲートウェイの IP アドレス, 3

ケーブル
シリアルデータケーブル用のアダプタ, 28
ケーブル管理部品, 19 ~ 24
ケーブルクリップ、使用, 30 ~ 32

こ

構成、ネットワーク管理ポート, 37
コネクタの図, 25
コマンド行へのアクセス、ALOM CMT, 38

さ

最小ケーブル接続, 6

し

システムコンソールのエスケープシーケンス
#. , 49
システムコンソールへの接続, 45
システムコントローラ
「ALOM CMT」も参照
setsc コマンド, 40
showsc コマンド, 40
システムコンソールへの接続, 45
システムの電源投入, 44
シリアル管理ポートの接続, 27
シリアル管理ポートを介したアクセス, 38
ネットワーク管理ポートの接続, 28
ネットワーク管理ポートは構成後に動作可能, 4
ネットワーク管理ポートを介したアクセス, 44
はじめての電源投入, 35
ポートの場所、図, 25
リセット, 42, 53
システムの初期化, 45
システムの電源の再投入, 49
出荷キットの内容一覧, xiv
使用可能への切り替え、ネットワーク管理ポート
, 37
シリアル管理ポートの RJ-45 コネクタ, 27
シリアルケーブル用のアダプタ, 28

シリアル端末
設定, 35
電源投入前に必要, 35
シリアルポート (TTY) DB-9 コネクタ, 29
診断、実行時, 35

す

スタンバイ電圧、3.3V, 35
スタンバイ電圧によるシステムコントローラの電
源投入, 4
スタンバイモード、AC, 29
ストップビット, 35
スライドレール構成部品のロック、図
固定部品の位置決め用のピンのロック, 15
固定部品のリリースボタン, 13
スライドレールのリリースボタン, 24
前面スライドレールのロック, 12
中央セクションのレバー, 14
スライドレールの間隔ツール, 17
スロット、ポート、および LED の図, 5, 25

て

定義、「用語」を参照, 11
電気モード、AC スタンバイ, 29
電源装置の場所、図, 25

と

取り付け手順、オプションのコンポーネント、参
照, 2

ぬ

ヌルモデムケーブル、TTY シリアルポート, 30
ヌルモデムケーブルアダプタ, 30

ね

- ねじ、ラック取り付け用, 16
- ネットマスク, 3
- ネットワーク管理ポート
 - RJ-45 コネクタ, 28
 - 構成および使用可能への切り替え, 37
 - 構成後に動作可能, 4, 37

は

- はじめての AC 電源, 33
- はじめてのシステムの電源投入, 33
- 場所、ポート、スロット、および LED, 25
- 場所、ポート、スロット、および LED (図), 5
- パス名, 46
- パスワード、ALOM CMT, 34
- パリティなし、シリアル端末, 35
- ハンドシェークなし、シリアル端末, 35

ひ

- 左側および右側の定義, 11
- ビット設定、シリアル端末, 35
- 必要な構成情報, 3

ふ

- ファームウェア更新の場合の admin コマンド, 52

ほ

- ポート、スロット、および LED の図, 5, 25
- ポートの図, 25
- ボーレート、シリアル端末, 35
- ボタン、「スライドレール構成部品のロック」を参照, 11
- ホットプラグ対応 USB ポート, 7

み

- 右側および左側の定義, 11
- 右側の定義, 11

も

- モード、AC スタンバイ, 29

よ

- 用語
 - スライドレール構成部品, 8
 - 左側および右側, 11

ら

- ラック取り付け用ねじ, 16

り

- リスト、オプションのコンポーネント、オンライン, 2
- リセット
 - システムコントローラ, 53
 - システムコントローラのリセット、resetsc コマンド, 42
 - システムのリセット、uadmin コマンド, 49

れ

- レバー、ロック、「スライドレール構成部品のロック」を参照, 11

ろ

- ログイン、システムコントローラ
 - シリアル管理ポートの使用, 38
 - ネットワーク管理ポートの使用, 38, 44
- ロケータ LED ボタンの場所、図, 25

ロック、「スライドレール構成部品のロック」を
参照

わ

割り当て、OpenBoot PROM デバイス, 46

